

163
576

圓乘院宣明講師講述
占部觀順副講師校閱

改悔文正理義解全

學海堂發兌

017523-000-2

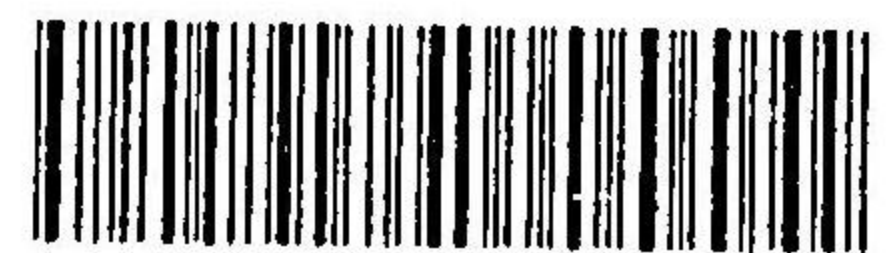
特18-375

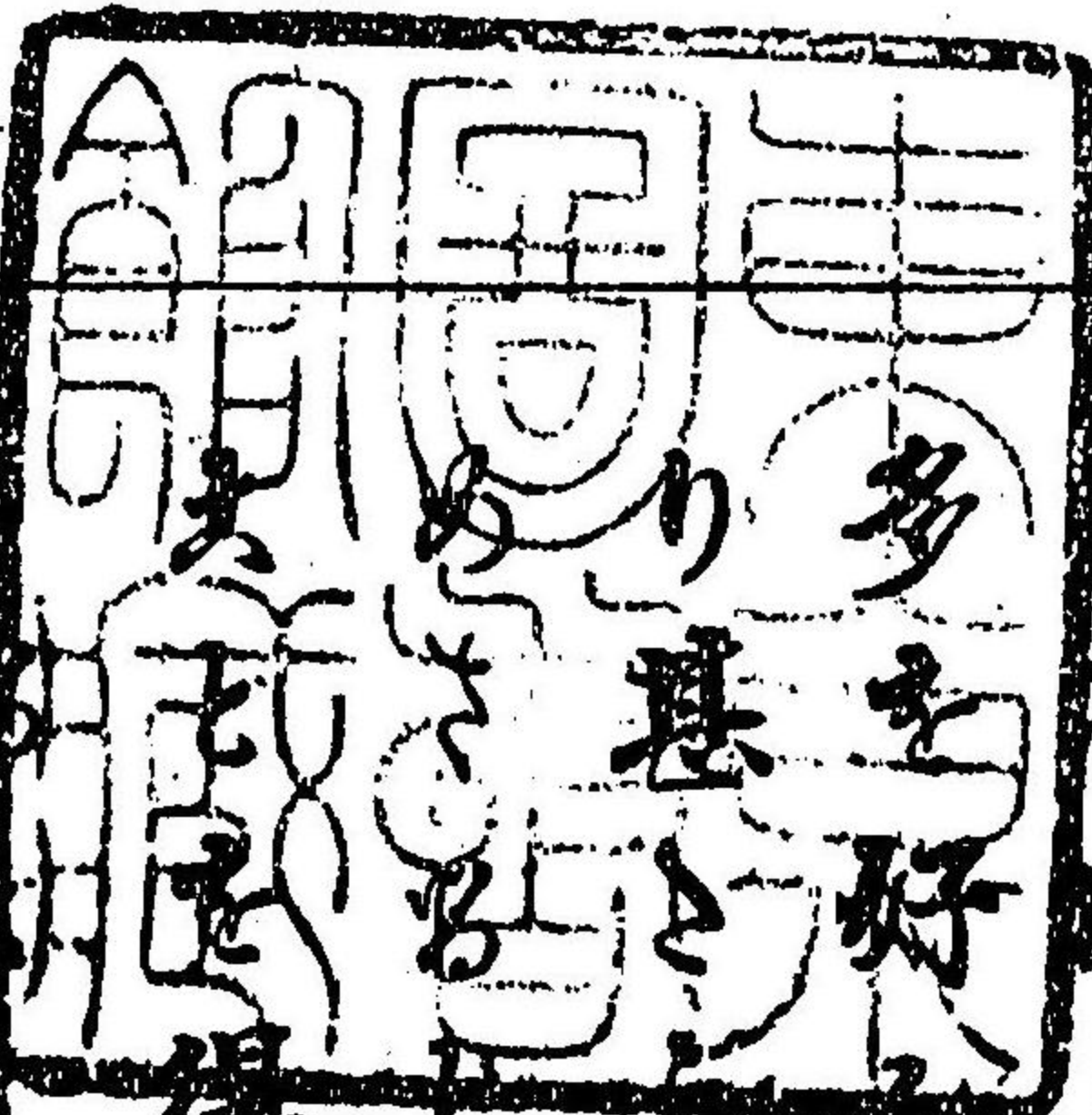
改悔文正理義解

宣明/著

M29.7

ABF-0308





序

夫學問此德在末を遂ふて本を求

多を好んで精しを去とを好むは

り甚とを無し末を遂ふて本を求

めさるるを去とを好むは明辨を

大に得る多を好んで精しを好む

は依學をるよ錯り無き去と

不能と去り其は昔異解者ありて三業

歸命は不正義去る安心を勧めて大よ



亂る而も私よ其れ規則を立て、相授
授を爲る者といふく、久を以てく、熾
本り即ち當時よ至りて愚か本るも此
尊信し服膺を其れ甚しきよ至りて左
一宗よ御依用此和漢此聖教乃勸め
今此時機よ應心ざりて教本りと云て唯
と此乃一紙此法語此其を依憑とを云
云蓋し其れ三業此軌式を滅よ正依此
三經七祖乃論尺一宗漢和此聖教よ見

へざりて處候本り更よ御本願よ於て昔
より嘗つて御依用無き一已附會此妄
説本り是れよ依て先輩之れが爲よ信
受本願義一卷を制して而も其乃本末
二科を立て、辨むと雖も考思廻らし
難ふして其れ途よ惑えん事を恐れ
一々之を論じ異解者此非本る事を解
了此爲めよ其れ繁文を以て本を漢和
乃聖教を鏡とし、御文を照見し此此

一紙法語を伺ふ所候未り誠に知る此法語に對して正法八十通に御文未り八十通を皆悉を此正法語に歸を依て此法語を領解未れを異解者乃錯解を辨論を待むして明未り依て先輩正説を潤色し以て之を述ぶ

宣明識

例言

一本書は圓乘院宣明講師文化元年二月富山縣放生津町専念寺に於て講せられたるものにして坊間に傳はる寫本は誤謬多く爲めに義理の所在を誤まるものあらんとを恐れ今回占部嗣講師の校閲を経て出版することゝなれり

一本書の附録即得往生義は同年十二月東京淺草御坊に於ての講述にして本書と其義を同じくせり然れども互に具畧あるを以て本書に畧する所を積して附録と一講師の意の所在を具さにし讀者の解了を周到ならしめんとす

一本書の講述は講師五十五歳嗣講に任ぜられてより十三年の後なり一本書の首書は校正者か初學の便に供せしものなり

校正者 巴陵宣教識

改悔文正理義解

講師圓乘院 巴陵宣明講述

副講 占部觀順校閱

巴陵宣教校正

緒言

此改悔文は河内國出口光善寺に相傳はる直に蓮師の御掟の言なり故
 に下の文に次第相承とあるを末學の者に於ては御相承と御の字を入
 れて唱ふべきなり當時世上法義盛なりと雖も法義安心筋種々惑乱せ
 り或はたの心と云へは腫物にあたる様に怖はがる人もあり或は念佛
 往生と云ふを嫌ふ族もあり共に是れ祖師善知識の意に契はさる料簡
 なり然れば朝夕御門徒中の示す御文の勸化を充分に意得されは善知
 識の御教化を取次申すとは云ひ難きなり故に此度改悔文を物語るに
 就ては八十通の御文の指南に依りて伺ふべし

改悔文の所
註は何にあ
るかを詳す

教相と安心
との別

禮説一丁に
文あり

此改悔文は日頃の安心領解を述へ顯す辞なり如是に安心領解仕りま
したと祖師聖人に申し上る領解の辞なり

惣して諸宗共に安心と教相と二に相分る其教相と云ときは解了とあ
る方なり其解了と云は文々句々を覺へる解了には非ずして安心の一
に入らしめん爲の解了なり然れば物本末あるの道理にて安心は根本
なり教相は枝末なり故當流に於ても安心と教相とを分て示したまふ
は愚禿抄なり愚禿抄の上巻は教相を明し下巻は安心を明せり其安心
と云は三信なり愚禿抄下は全く安心なり其安心より起る所の教相な
り然れども愚禿抄下巻の如きは云は、安心の法門を述へたものなり
安心てはあれども法門を述へたもの故に容易には伺ひ難し詮する所
安心と云は彌陀の本願を深く信するか安心あり信心あり其義は善導
禮讚の深心尺に深心者卽是眞實信心とあり本願眞實をは疑ひ无く信
するか信心なり安心なり取り易き安心の趣きなり然るに己か計ひを

不斷相續

以て或は信に片より或は行に片より計ひましまし本願を計らふ故に其
計ひを止めさせんと種々の法門を述たふが善導の八紙に餘る三心釋
なり其義をは解し易からしめん爲の指南の愚禿抄なり然れば安心と
云は凡夫か佛になる因なり東西をも辨へず文字の縦横をも知らず何
か安心やら信心やら雜行やら雜修やら自力やら知らざる凡夫を佛に
したまふ安心なり夫を愚痴の凡夫へ教へたまふ御文の御教化なり先
其大体を云は、南无阿彌陀佛を心に於けは信心なり口に顯せば稱名
なり其体一なり然れども信心は心不斷にて往生すとありて寐ても寤
ても信する心はされま无く憶念相續すれども口に稱る稱名はされ間
あり夜る臥て居る時は稱へず盡は世俗に紛れて一時間斷するともあ
り二時間斷することもあれども時々口へ佛恩の稱名の浮むは起行な
り如是信心稱名と名か變り相も異なれども体は一にして信を離れさ
る行々を離れざる信とのたまふ然れども凡夫の手前ては二つある様

改悔文は六
字の意なる
ことと述す

に思ふなり故に元祖も信か行を妨ぐる行か信を妨くると誠めたまへ
り祖師も信心ありとも名號を稱へさらんは詮なく候又一向ニ名號を
稱ふとも信心淺くは往生し難しとのたまへ或は一念こそよけれ多念
こそよけれと争ふ故に一多証文を造りて一念をひがふと思ふまじき
こと多念をひかと思ふまじきことと指南にたまひてあり其義をは
増減せず相承したまふ代々の善知識あり別して覺師口傳抄等に具に
釋あり故に今蓮師は祖師の釋を相嗣ぎて當流安心の一義と云は只南
无阿彌陀佛の六字の意なりとのたまへり南无阿彌陀佛の六字をは心
にありては信と云口に顯しては佛恩報謝の稱名と云なり名二にして
信相行相と分れたれども其体は一なり阿彌陀佛をたのみたてまつる
信心一にて往生するなり其信する心がそつくり口に顯るし稱名にし
て口も心も一ありと心得とのたまふ唯今の改悔文なり
もろくの雜行雜修自方のこゝろをふりすて、止六字の意なり一心

改悔文の據
と述ふ

に阿彌陀如來我等か今度の一大事の後生御助け候へとたのむは南无
の二字の意たのむ一念のとき往生一定御助け治定とは阿彌陀佛の四
字の意なり如是く心得聞きはけたが信心決定あり其信心の上より此
上の稱名念佛は御恩報謝と喜び申候と口に顯はるし稱名なりと云指
南なり是か大体のすはりなり

總依三經別
意大經

問曰此改悔文の御言は何の聖教の御言より出るや答曰通して云とき
は御本書六卷の中より出たり然れども別して云へは信卷より出たり
信卷は全く第十八願を顯すなり和讃に至心信樂欲生と十方諸有をす
ゝめてそ不思議の誓願あらはして眞實報土の因とするとあり是か第
十八願の意信卷の物休なり此第十八願を心得るには成就の文を以て
心得よとある祖師の御指南なり他流ては總依三經別依觀經總じては
三經なれども別しては觀經なり觀經の意を以て第十八願を心得るが
他流の安心なり當流は總依三經別依大經の安心なり惣じては三經な

れども別しては大經に依ると云か今家の意なり近くは教行信証大意
を見るべし其大經の安心と云は即願成就の經文なり大經の安心か願
成就の文なりと云は信卷の御指南なり其義を覺師の改邪抄に明白に
指南あり故に蓮師は此大經安心を開て教化したまふ八十通の御文を
り信心獲得の御文に信心獲得すと云は第十八の願を心得るなり此願
を心得ると云は南无阿彌陀佛の相を心得るなりとあり是か聞其名號
信心歡喜の願成就の文の意なり南无阿彌陀佛の六字の相と云は一念
皈命の立ち所に即得往生の大利を得ると云か南无阿彌陀佛たのみ者
を助けんと云六字の安心なり故に此義は當流一途の處談あるものな
りと言を改て示したまへり又五帖目第十一通御正忌の御文に抑信心
の体と云は經に曰聞其名號信心歡喜と云へり第十八願の三信をは唯
一の信心なりと顯す今の心此經文の聞其名號の聞き様は云何と云に
善導の言南无者の釋義に依て六字の聞き様を指南したまへり實に大

心海より化してこそ善導和尚とをばしける南无阿彌陀佛の講釋は佛
に非ずしては出来る筈なし阿彌陀佛の証も六字なり凡夫か佛になる
も六字なり此凡夫か佛になることばりを教へん爲に阿彌陀佛示現と
て善導と顯れたまふ此言南无者の文を全く願成就の經文の意なりと
究めたまふか吾祖の行卷の指南なり實に漢土にありて善導と顯れ言
南无者の釋あり我朝にありては祖師と化現してたのみ一念の所にて
發願回向に預り即得往生の利益なりと釋したまふ實に淨土一家に於
て我れも我れもと數々言南无者を釋すれ共成就の文と全く同一とな
りと指南せるは獨り吾祖なり此意をは八十通の御文へをし渡して教
化したまふ蓮師なり別して十五六箇所に言南无者の釋を引て教化し
たまふ如是大体すはるへし○問曰成り程其義は聞へたり只今の改悔
文か願成就の經文の意なりと云其証云何○答曰信の上の稱名をは佛
恩報謝なりと云は願成就の經文の意なり其故は本願の乃至十念は選

釋本願の行なり報謝の誓には非るなり佛は報謝の誓を立てたまふ筈
なし乃至十念は選釋本願の行なり此乃至十念を願成就の經文の上よ
りふり歸りて窺へは信の上の稱名なれば佛恩報謝となるなり夫は云
何と云に即得往生の上の稱名なれば佛恩報謝に非ずして何そや往生
の業因とはからひ慕るなれば自力なり一念たのむ意の起るとき佛の
方より往生を定めたまふと知り乍ら往生の業因と計らひ慕りて稱ふ
るなれば自力の企てなり是を稱て罪を滅する心なれば定散の念佛な
り流轉の罪が滅したればこそ往生を定めたまふなり行者の機に於て
往生を定るに非すたのむ心の起るとき生死流轉の罪が滅する故に往
生の障にならぬとを推し究めて往生を定めたまふなり然れば滅罪の
爲に稱ふるに非す佛の方より往生を定めたまふ御恩有り難や貴やの
佛恩報謝の稱名なり其往生を定めたまふは何れの時ありや頼む一念
の時往生一定御助け治定の安心あり其上の稱名なれば佛恩報謝なり

改悔文と成
就の文に配
す

本願の乃至十念の誓をは如是乃至一念の一念の言に攝して信の一念
の所にて往生定ると顯したまふか願成就の經文なり其時に命終れば
直に淨土に往生すべし若命延れば多念の稱名とあらう所なり是か成
就の經文の意なり此願成就の經文の意を以て第十八願を心得よと云
か我祖の信卷の御指南なり其義を全く只今改悔文に顯したまふなり
又文を成就の文に配せはもろくの雜行雜修乃至たのみ申て候聞其
名號信心歡喜乃至一念の意ありたのむ一念の時乃至喜ひ申候即得往
生住不退轉の意なり是か南无阿彌陀佛の相たなりたのむ者を助けや
うと云六字の相たの理りを領解の出来たか信心決定なり其信心決定
通り口に顯して南无阿彌陀佛と稱ふるか佛恩報謝なり此上の稱名は
御恩報謝と乃至ありかたく存候とは他流未談の安心當流一途の所
談なり他流には正覺一念の安心あり佛の正覺の外に衆生の往生なし
衆生の往生の外に佛の正覺もなし我等か往生は十却正覺の一念に定

めたまふと云ふ西山の安心なり又臨終一念の安心あり助けたまへ南
无阿彌陀佛か臨終今はの時に至りて佛の來迎にあつかる時往生定る
と云安心なり然るも今家の教は十却の昔に我等が往生を定むると云
安心にも非す又臨終の時佛の來迎をまちて往生を定むると云安心に
も非すたのむ一念の時往生治定と願解する安心か願成就の經文の意
なりと教へたまふが祖師聖人御出世の御恩あり實に身を粉にし骨を
碎きてもあきだりは死きなり此を増せず減せず相續したまふ次第相
承の善知識の淺からざる御勸化の御恩とありがたく存し候實に持ち
易き稱へ易き名號なり此上には定め置かせらるゝ御掟一期を限り守
り申すべく候唯除五逆誹謗正法の意なり是祖師の御前に於て述顯す
改悔文なり上來は此改悔文は信卷より出て願成就の經文の意なり
とする趣きなり是より此改悔文の依て起る理由を辨し夫より御文の
御勸化へかけて辨したきなり是義解學問に非す淨土參りの相談なり

改悔文と著
したまふ因
由と述ふ

もろくの雜行雜修自力の意をふりすて止此改悔文は信卷の中よ
り顯れ出て即大經の安心願成就の經文を顯したまふと云と昨日大体
辨し終る○問曰此文は云何なる緣によりて著したまふや○答曰上人
此世に出現したまふは淨土眞宗再興の爲なり遺徳記に眞宗再興の徳
と云一科を立て懇ろに願してあり只今此一科を畧して辨せば應永
二十七年十二月廿八日上人六才の時あり母御蓮師へ對せられて物語
りに兒の一代に聖人の一流を再興したまへと懇ろに述べたまへりかく
物語りていづ方とも無く行きたまへり六角堂の方へ行きたまへりと
或人云へり然れば母御は六角堂の觀音の化現なり祖師の時には此觀
音の御示現によりて淨土眞宗を開きたまへ蓮師の時には此觀音か母
御となり此淨土眞宗を再興する様にと懇ろに傳へたまへり故に十五
才より再興の志頻りあり故に淨土眞宗の中絶せる所を再興したまふ
故に中興上人と云なり是か遺徳記の意なり此中の字は去聲の時には

あたると謂す中風と云時は風にあたると云事なり今も然り此眞宗か
中絶せる時に當りて興隆したまふ上人故に中興上人と云なり其眞宗
を再興したまふ所か五帖一部の御文なり○問曰此眞宗は云何なる故
ありて中絶せるや亂世故か又他宗他門より難題ても出て來りたるや
○答曰亂世も非す又他宗他門よりの難題にも非す喩へは我家も鼠
あるも如し他家の鼠には非す其我家の鼠か家を食ふなり佛獅子身中
の虫なりと云喩を以て誡めたまへり淨土眞宗の其家にありなから其
眞宗を喰ひ破る鼠あり其鼠とは四種あり一は十却頼二に善知識頼三
に不拜秘事四无信稱名此四種の鼠か淨土眞宗の家を喰ひ破るなり凡
夫往生の道を塞く鼠なり故に此鼠に喰ひ破られぬ様に眞宗を再興し
たまふ導師なり其四種の秘事ハ御文の上に顯せたり譬して其四種の
秘事を辨せは

一に十却秘事 と云は一帖目十三通二帖目十一通に出たり十却正覺

の始より我等か往生を彌陀如來の方に定めましくたまへるを知
て忘れず疑はぬか信心なり別に阿彌陀佛をたのみか信心に非す夫は
自力なり我等往生を如來の方に定めましくたまへると知た所か三
信なり三信と云ものは行者の方に起す所に非す佛の方に我等か往生
をすまして被下たと云とを知らせるか三信なり故に正覺の一念に我
等か往生はすんであるなり佛の正覺の外に衆生の往生もなし衆生の
往生の外に佛の正覺も無し是か機法一体と云ものなり南無の機は往
生なり阿彌陀佛は正覺なり往生の外に正覺無し正覺の外に往生なし
と十却の昔にすんである只南無阿彌陀佛の一なり右の通りか先根本
の秘事なり是よりたのみと云とを嫌ひ信すると云とを自力と嫌ふ實
に祖師の信の一念の所にて往生治定と致たまふを閉ち塞く安心なり
故に先輩惠空は此十却の秘事は阿彌陀佛の四字の謂れを知るに似た
れども二字を忘るたる安心なりと云へり古來四字安心と云か此類族

なり此安心今代にはあるまじと思へとも御文を讀なから改悔を唱へ
 なから此所へ落て居る安心あり近くは出羽に於ての異義者の安心か
 全く是又同じ一念皈命と云は十惡五逆の惡人女人をはそつくり其體
 助け様と云大悲へ目の着いたか一念皈命の心なり行者の方に助けさ
 まへと云たどて埒ちあかぬ信するが實の信心ては無へ助けやうと云
 大悲へ眼の着たのが一念皈むと云ものなり是ては自然十却秘事へ落
 るなり助けやうと云大悲は法体なり夫て往生と云ては法体往生と云
 ものなり今家は不然信心往生とのたまひ念佛往生と勤めたまへり御
 文に今の信力によりて御助けありつることの實とさまよと云へり然れ
 は南無の信心あまは阿彌陀佛は離れざる眞實信心必具名號のことは
 りなり故に一念如來をたのむが肝要なりと教へたまふか今家の安心
 なり御文を能くく熟讀すべし

二に善知識願 二帖目第十一通に出たり亦帖外の御文にも善知識願

善知識願

改邪抄末十

丁巳下見る
へし

命なんど云とも更に以てあるへからすと誠てあり是は覺師の改邪
 抄に善知識願を擧て破斥してあり其意は凡形の知識を指て如來の色
 相と眼見せよと只今敬ふ本尊を佛と拜むことも無く佛智を佛と拜
 むことも無く其教へる所の知識を佛と拜むなり故に覺師は一向も
 ろくの聖教にも無く祖師の口傳にもそむき進んては智者に笑はれ
 退ては愚者を迷はすべき謂これにありあさましくとのたまへり世
 に傳て善知識たのみの安心を顯はせる書覺如上人の述と名を誌し或
 は如信師の作と名を顯して開板せるあり他力了解抄等なり其書を見
 れは大悲心と云か佛心なり大悲心と云は衆生を助けたまへと云か大
 悲心なり夫れか直に佛心なり其佛心を全く受け傳へる人なれば形は
 凡夫の形なれども心は佛心なり心か佛なれば其形も如來の色相と拜
 むなり然れば此佛心を本尊とするなり此安心全く十劫安心よりか様
 な謬りを申すのなり實に愚者を迷はす勸め方なりつひ思へは尤もら

しく請けまひものでも無へ此安心も近代無きに非ず本山は只看板と心得師匠手次の寺は世間のをもむきと思ひ實に眞の善知識は此人なりと竊かに勤むる法か近代所々にありて成は公義に咎められ或は本山に呼出されて御札に遇ふなり實に家内の鼠なり家か無れば鼠は居らね共家ある故に如是鼠あり淨土眞宗の家の鼠と云は是なり故に善知識の心を傷めたまふは此理りなり

不拜秘事

三に不拜秘事 二帖目第十四通三帖目第三通に出てたり是は越前三門徒拜まずの徒衆とて如道の弘めた所の法義なりまのあたり覺如上人の教を受けて如道と云名をもらひながら此邪義を弘めたり故に改邪抄には嚴く破斥してあり唯心の彌陀己身の淨土の安心にして本尊を禮拜するに非ず適々も禮する時は掌をまげて我か胸を拜むなり本尊を不拜と云より不拜の秘事と名くるなり此安心近代にも在る極樂の彌陀と云も遠ひ手次の彌陀と云も遠ひ我家の内佛を拜むにも及はぬ

最要抄一丁
佛心信心

拜み度くは口に稱へる南无阿彌陀佛か助けたまふ佛なり故に拜み度くは我口に稱へる念佛を拜めよと云是自ら唯心の彌陀己身の淨土の安心に落るなり是は善知識頼不拜秘事の心得違なり善導大師の念佛稱へたまひて口より佛の出現したまひたは善導の別徳と云ものなり然れば是は云何か心得るとそと云に覺爾の最要抄に此佛心を凡夫に授けたまふ時信心と云はるゝなりと此文か善知識頼不拜秘事を破斥したまふ釋なり大悲心は佛心なり其佛心をは凡夫の方へ授けたまふ時には信心と名か變るなり信心と云は本願を疑はず眞受にするとなり是佛になる因にして果には非ず和讃に不思議の佛智を信するを報土の因としたまへり又至心信樂欲生と十方諸有をすゝめてそ不思議の誓願あらはして眞實報土の因とすると三信なから大悲心なり是か佛心なり行者の方へもらひ受たれば報土の因となるなり此因をもらうた故命終る次第に彌陀同体の証果を得るなり此とはりを心得誤り

て一益の秘事を起して我身か佛我身が浄土と云は實に智者に笑はれ愚者を惑はす忘解なり時に南无阿彌陀佛の六字は佛の証りなれば行者の方へもらひ受けても佛であるへしと思ひさうとなれ共然らず喩へは今年の果實は來年の物種になる如し今年て云へは果實なり來年の方へ望れは物種なり今又然り彌陀の方に有ては不可思議兆載永却に成就せし果實正覺果名の南無阿彌陀佛なり是を行行者の方へもらひ受たれば本願名號正定業凡夫か佛になる因と定めたまふなり故に他力の信行とも悲願の信行ともたまふ故に不可稱不可説不可思議の功德は行者の身に満てりとのたまへ共佛が身にみつるとはのたまはさるなり佛体の功德と名號へ攝めて衆生の方へ與へたまふ故に功德か身にみつるなり御文五帖十三通夫南無阿彌陀佛と申す文字は其數はすかに六字なればさのみ功能のあるべきともとほへさるに等と仰せらるゝも此所なり口に稱ふるは佛恩報謝なり心にたのむは一念

の信心なり

无信稱名

三帖目三通
及五通と見
るへし

四に無信稱名(或は高聲念佛の秘事と云)是は佛を呼ひ出す心て名號を稱へるなり是か善知識頼不拜秘事の類族なり胸にある佛を呼ひ出す稱名と云意なり御文には夫と云はずに只聲に出して念佛はかりを稱る人はたほやうなり又只何の分別も無く南無阿彌陀佛と稱ふれば等とありて只稱へる中に頼む心もあり信する心もありて別に信するとはなくともよしと心得るなり是は世間に手弘に心得顔に口稱を募るは此安心なり是は口稱本願を心得誤りたのなり口稱本願は只稱へる口稱に非す深く信して稱ふるに就ての口稱なり其迷ひは觀經下々品に汝若不能念者應稱無量壽佛と説けり不能念者の念とは觀念の義に非す昔より解し難き文なりと云へり是れは唯信抄文意に心に彌陀を稱念し奉らすは只口に南無阿彌陀佛と稱へよと勧めたまへる御法なり是は口稱を本願と誓へたまへるを顯さんとなり文と云へり稱名と

唯信抄文意
八丁

口稱本願

は心を以て六字を稱へるとなり是は六字の謂れを心に浮へて稱へる
か心に稱念して口に稱ふることあり彌陀の御助けは尊きことかな
ゝる者を此儘なから助けたまふ本願そと心に浮へて口に唱ふる時は
心に六字を稱念し口に六字を唱へると云ものにして夫は平生業成の
時のことなり只今十惡五逆の罪人百苦に責められ火車の氷現を迎ひ
て居る惡人苦に責められて居る故に中々心に六字を浮へること契は
さるなり其所を善知識の勧めに心に浮へ思ふこと契はすは唯口に南
無阿彌陀佛と唱へよと是か口稱本願なり是全く無信の稱名に非ず如
是至心令聲不絕具足十念稱南無阿彌陀佛とあれは如是至心と深く信
して稱ふるあり其信する心と云はなかく凡夫の覺へらるゝ様な暇
の有ることに非ず本願の謂れを聞くなり信するなり貪瞋煩惱は一は
く起れども實の信心は彼等にもさへられざる信心なれば火車の來
現か障になる様な信心に非ず此信する心の發ることは佛より外に知

三帖目三通

る者は無きなり佛のみ能く知りたまふなり其信する上に稱へるに就
て六字の名號の尊さを思ひて稱ふればよけれ共身か苦に責めらるゝ
故に心に思ふと不能は只た稱へよとなり是か口稱本願なり如來の誓
なり是臨終まで待つには及はす今日の凡夫自分か稱ふる稱名てさへ
覺の無き散乱心で唱れども此か口稱本願あり故に御文に此念佛の謂
れを能く知りたる人こそ佛にはなるへけれと云へり又何のやうも無
く彌陀を能く信する意たにも一に定れば易く淨土へは參るべきなり
とのたまへり南無阿彌陀佛の謂れと云は彌陀を信するか南無阿彌陀
佛の謂れなり深く信して稱ふるに就ての口稱本願なり
上來の四種の秘事か眞宗の道を塞く故に此四種の秘事を破して一宗
を再興する所ろの八十通の御文なり
是を改悔文にあてゝ辨せはたのむ一念の時往生一定御助治定と存し
是れ十却秘事を簡ふなり十却の昔に往生定ると了解するに非ず頼む

正しく四種の
秘事を改悔の
文に配し
ての辨破す

一念の時往生一定の安心なり阿彌陀如來我等か今度の一大事の後生御助け候へと頼み申て候とは善知識頼を簡ふなり善知識頼に非ず善知識と云は阿彌陀佛に皈命せよと云へる使なり故に阿彌陀佛頼にて善知識頼に非ず又我等か今度の一大事の後生御助け候へとたのみ申て候とは不拜秘事を簡ふなり云何とあれば是一大事の後生をたのみにし力にする佛を拜ますに居る道理無き故なり僅かの世渡りの爲に下げまひ頭も下げ跪つき手をつくなり況んや來世は地獄より外に行き方の無き者を助けたまへる彌陀如來と頼にし力らにする佛を拜ますに居るべき道理は無きなり拜みあきの無ひ佛を拜ますして我が胸を拜むと云致は聖道淨土の教判には無きなり實に外道の法なりと誡めたまふ所あり煩惱に眼さへられて攝取の光明見され其大悲ものうきと無くて常に我身を照すなり源信僧都は女人禁制の叡山恵心院の住持したまひ其徳と云へは漢土に於ても源信如來と敬ふほどの

勝れた僧なり時代を云はし八百年己前の事なり徳と云ひ時と云ひ居所と云ひ尊き身柄なり其源信僧都か煩惱に眼さへられて攝取の光明を拜まぬとのたまへり然るに我々如きの煩惱成就の凡夫か五欲の家に住みなから後生のことは忘れ渡世のみに日を送る者か光明を拜まれやう筈はなきあり故に方便法身の尊形を本尊として拜むに何の不足かあらん臨終の夕へまては此尊像を拜み命終る次第には攝取の佛体を拜むなり然れば不拜秘事獨りでに破るゝなり此上の稱名は佛恩報謝と喜び申候とは信の上の稱名なり只口に稱る所の無信の稱名に非ず是信後の稱名にして即佛恩報謝なり右の通の四種の鼠に喰ひ破られざる様に用心せよと云此改悔文なり然れば此改悔文の依て起る所謂は此四種の秘事の邪を破し眞宗の正意を顯すにあり眞宗の再興と云は外は無ひ一念如來をたのみ奉るとき往生治定の上には御恩報謝の爲に一期を限り念佛せよと云ことなり

もろくの雑行雑修自力の心をふりすて、止此改悔文は蓮師の孫如宗禪尼へ授與したまへり此禪尼は光善寺第二代目光淳の室實如上人の姫公なり光淳は常樂臺より光善寺に住職せり

改悔とは三帖目十一通毎年不欠の御文に始て改悔と云言あり今月二十八日の御正忌七日の報恩講中に於て心中の通りを改悔懺悔して乃至何の所詮も有るべからざるものなり文是か出口にありて今年初て報恩講を勤めたまへし時の御文なり吉崎より出口へ移りたまへて當國に越へ初て今年聖人の御正忌の報恩講に逢ひ奉る條實に以て不可思議の宿縁喜ひても喜ぶべきものかと有るは出口を指たまふなり然きは七晝夜の間面々の了解の趣を祖師の御影前に於て申し上げたど見ゆ三帖目第十通神明六箇條か吉崎での終りの御文なり六箇條の御文に一國の佛法の次第非義たる間正義に趣くべきこと、夫れを下に委く述て五には國の佛法の次第當流の正義に非る間且つは邪見に見

へたり所詮自今己後に於ては當流眞實の正義を聞て日頃の惡心を翻して善心に趣くべきものなりと云へり先越前に弘る十却秘事不拜秘事善知識頼無信稱名等の秘事諸國にもちらく有らうかなれ共是を傳へる本は越前なり故に國の佛法の次第當流の正義に非る間且は邪見に見へたりとのたまふ日頃の惡心とは右の四種の秘事法門を指すなり此秘事を捨て、善心に趣くと云か當流の正義なり其正義に趣くべき相たは此改悔文あり是れに依て吉崎に逗留して眞宗再興したまふ夫より出口に於て初て報恩講の御文御制作是まで報恩講の御文は無きなり此報恩講の御文に始て改悔懺悔とのたまふ故に人々聖人の御前で領解を申上たと見ゆ其趣きを上人聞きたまひて惡るき所を一々改めたまふ故に定て如宗尼も夫を聞きて願へしか又上人此の通り心得るか當流の正義なりと云ひて授與したまひしか其義知れ難し改悔と云言を罷して解きは改は改轉とつゝひて心を改めることなり

日頃の悪心を翻して善心に成りかへること今の言ては一心に阿彌陀
 如來我等か今度の一大事の後生御助け候へとのみ申て候と改めた
 所なり是か四種の秘事の改つた相たなり悔は悔過とついでて罪を悔
 ゆることなり罪と云は佛祖の制戒に異するを罪と云今の所ては必ず
 疑ふこと勿れ謀らうこと勿れと佛も嚴く説きたまふ已に大經の説相
 は諸經の説相とは違ひ初に説法をなされ其上に極樂の様子を一々顯
 して見せて大經の會坐と淨土と一つに成りて淨土よりは大經の會坐
 を見たまひ會坐の人々は淨土を拜見し説きたまひた通りに現れ現れ
 た通りに説きたまひ此上に疑ひあらは申せ唯一心に念佛するはかり
 て今拜む淨土に往生するそと説きたまふ如是説相を已か計ひを以て
 疑ふ故に甚た重き罪なり其過りを悔ゆるが悔の字の意なり其をもろ
 くの雜行雜修自力のころをふりすてよとのたまふ如是心得るは
 私に非ず大經の下卷に若此衆生識其本罪深自悔責求離彼處文其本罪

とは本願を信せず佛智をたのまさる罪なり其罪を自ら悔責するなり
 彼處とは化土を離れんと求むるなり和讃に佛智疑ふ罪深し此心思ひ
 知るならば悔る意を旨として佛智の不思議をたのむへし文と云へり
 是か改悔の根本悔ゆる意と云か悔の字の意なり佛智の不思議をたの
 むへしとは改の字の意にして改むること唯不思議と信するより外は
 無きなり如是一向一心にたのみて悪き心を翻すか改悔懺悔の意なり
 依て大經と和讃とで改悔と云ふとを心得へし如是此改悔とついで言
 は大方等陀羅尼經四初默然而受檀越供養而不改悔文起信論一義記下
 末丁左心生怖畏慚愧改悔止文如是經論の上を窺ふに何れも佛の制戒
 にそむき守らざる罪を懺悔して改めるを云ふ又觀念法門に令生改悔
 信佛大乘廻生淨土とあり此改悔と云は願生淨土の教を疑ひ計らふて
 改悔する意なり又報恩講式文に初成疑謗之輩如瓦礫荆棗遂令改悔之
 族同稻麻竹葦皆翻邪見悉受正信共止偏執還爲弟子文と初は祖師の教

を疑ひ誘りし者も後には皆改悔せしとなり今の所は聞其名號信心歡喜の勤なり明信佛智の勤めをば已か計ひを以て今日まで淨土往生せずして六道生死に止ることをは改悔するか今の趣きなり已上改悔の意を畧辨し終る四帖目第五通に所詮今日報恩講七晝夜の内に於て各々改悔の心を發して我身の誤れる所の心中を心底に残さずして當寺の御影前に於て回心懺悔して諸人の耳に是を聞かしむる様に毎日毎夜に語るべしと云へり此御文は山科に在りての御文なり此所にも改悔の心を起してとあり日頃取り違へる趣きを心底に残さずして上人の前に出て有り様に申して諸人の耳に聞かしむる様に毎日毎夜に語るべしとなり然れば報恩講の時祖師の前で改悔を申し上ることは是より始まると見へたり實悟記に報恩講のと御文にも遊しをかれ候ふ如く乃至前代無きことに候と具に物語りあり上人の時代に於て報恩講に晝夜か過くると諸參詣をば皆退く様にのたまひ其跡にて祖

祖前に改悔
と申し述ぶ
ること

實悟記三十
左

師の前に出て或は五十人或は三十人等第一僧分が改悔を申上げ夫より一人つ、進み出て、申し上る甚た殊勝なり惡き所は上人は夫は了解か異するとなをしたまへり然るに只今ては其もやうが違ふて五十人百人つ、一時に申す故理けも聞こへす安心の相異も聞へぬ様になるは先代には異りと云實悟記の意なり此實悟師は長命にして蓮師實如上人証如上人顯如上人迄居たまひた此記の述作は証如上人の時代と見ゆるなり今ても本山に其式傳へて七晝夜に改悔文をあぐるに改悔寺と云て一ヶ寺く名をなのりて改悔を申し上げ夫より一統に改悔を申し上くるなり是より今の如く文言を定め有りたとは見へす今の通り申上くれはなをすことはいらぬあり古へは然らす面々の領解を包まらず申し顯す故に夫を聞きたまひて夫れては惡るしと御なをしなざる、なり故に其改悔を申あぐるに就て安心の心得様を如宗尼へ書き認めて進せさせられたのなり今も本山に唱ふるに一ヶ寺く其

文と分科す
此の下の附
録初丁已下
と對照すへ

安心信心は
言異意同な
ることを極
めて元祖よ
り吾祖の相
承したまふ

安心の眞意
那点にある
やと知らず
んは御文收
得文を伺ふ
不能ことと
切に購違す

言が異なるなり然るに此改悔文を彌陀をたのむ道具の様に思ふは誤りなり御佛前で申あくるてはなほ祖師前で申し上るを善知識なをいたまふなり念佛にも佛け讀みが有ると誠めてあれば若や願解讀みの安心なれば殘念なり一代記問書にも蓮師乃前て改悔の機なとを申上げたきは口と身の用らきとは似るものなり心ねか能くなり難きものなり成程口と形とは似き共心は似ぬなり然れば眞實の心て述へねは實の願解とは云へぬなり畧して改悔文の依て起る由來を辨し終るもろくの雜行雜修自力のこゝろをふりすて、止是を四に分つ初に安心(もろくの雜行雜修自力乃至たのみ申て候)二に報謝(たのむ一念の時乃至喜ひ申候)三に所思此御ことばり聽聞申し乃至有り難く存し候)四に御旋此上は定めをかせらるゝ乃至守り申すべく候)もろくの雜行乃至たのみ申候 是は初に安心を述ふ安心と信心と言は異なるれ共意は同一きなり安心信心別にするは誤りなり善導大師

の往生禮讚に安心起行作業と明して其安心とは信心のとなりと具二觀經の三心釋あり此禮讚をば撰集の三心章にも引用あり又祖師の御引用は分けて引用あり初の至誠心の釋と後の回向發願心の釋は化土卷も引用ありて信卷に引用無きなり第二の深心釋は行卷にも信卷にも引用ありなせと云に行不離信々不離行と指南する意て兩卷に引用あり然れば吾祖の意は深心の一を肝要としたまふなり其深心と云は禮讚に深心即是眞實信心とあり是れか當流の安心なり此安心一て報土往生するとを得るなり先是の元祖より吾祖へ傳はる所を心得ずしては御文の上かはからぬなり選擇集に當知生死之家以疑爲所止涅槃之城以信爲能入故今建立二種信心決定九品往生者也文と當流に於て信心か肝要と云か全く元祖相承なり生死家以疑爲所止無始已來今に至るまで極樂に往生せずして生死に止るは疑の一に依てなり其疑の相たは云何と云にもろくの雜行雜修自力の心なり此の雜行雜修

自力の疑の心一て生死に止る故に是を捨てねは報土往生かなひ難し
涅槃の城に入るは信心一つなり其信心と云は云何なる信心と云へは
彌陀を信する信心一つなり何のはつらひも無く何の様も無く信する
はかりて一心に我等か今度の一大事の後生御助け候へどたのみ申て
候の心なり故に建立二種信心決定九品往生者也とあり二種の信心と
は信機信法なり信機とは我身は無有出離之縁の者と信する心なり世
間又是を誤りて地獄者と思へど無理に地獄者と信せよと勤める者あ
り是大なる誤りなり地獄者と思ふ下より欲も起り腹も立つかり信機
とは自力かなはさる人なれは地獄者なり雜行雜修自力は其体煩惱に
非す目出度藥なり然れども報土往生の因には非す我等如きの五逆十
惡の惡人五障三從の女人の難治の三病は雜行雜修自力の藥ては治ら
ぬなり然をば夫れを捨てたきは跡に助かる手段は盡きはて重病の身
にて地獄ならて行くべき方は無きなり故に助かるべき手段は一心に

彌陀をたのむはかりなり此彌陀の手を離れば地獄離して外に行き方
は無きなり喩は病人には藥あり其藥を服せぬときは必定大病の死人
と云ものなり食も少しは喰べ身も少しは動けども藥有りなから吞さ
る時は決定死人なり今又然り凡夫は重病の上に諸の諸善万行の藥を
止めたればいやあから地獄ならて行方は無したとひ雜行雜修自力の
目出度藥を貰ふてからが治せず眞實報土へ往生することは叶はぬな
り凡夫か佛に成る藥は外には無ひ決定地獄なりと信じたか信機なり
箇様の重病人を助けたまふは阿彌陀佛はかりなり一心にたのむ者は
たとひ罪業は深重ありども必ず助けんとある彌陀をたのむはかりな
りと知りたか信法なり此藥無くんは云何せん爰を元祖は建立二種信
心決定九品往生者也とのたまふ然るを無理に地獄者と思へど云其あ
とから徒足參をしたり密そりと札をはりたりするは爰の事理けが辨
へなき故なり然れは雜行雜修を捨てたれば地獄者此者か助かるは彌

念佛往生

陀をたのむはかりと勸めたまふ是か元祖を以て二種深心を心得るの
なり是より我祖へ亘りて可辨

禮讚に安心と云は即信心なりと御指南あり其信心と云は深心あり深
心とは即是眞實の信心なり此義を上に掲擇集へかけて辨せり今祖師
の釋に亘りて辨せは眞實信心と云は念佛往生と深く信してとある深
く信する信心のとなり其念佛往生と云は云何と云に一多証文に名號
を稱ふると十聲一聲聞く人疑ふ心一念も無れば實報土へ生ると申す
意なりとあり是れか全く禮讚の眞實信心の釋なり禮讚証文對映して
伺ふべし先此文の上を云は深く信して念佛十聲唱へて目出度往生
を遂げしか觀經の下々品なり一聲念佛して目出度往生を遂げたか下
上品なり又深く信する立所に一聲の稱名をまたすし聞名の位にあり
て往生を遂たか下中品なり故に名號を稱すると十聲一聲聞く人疑ふ
心一念も無れば實報土へ生ると申すなりとのたまふ是か如來の本願

末燈抄二十
に念佛往生と
深く信して
等の文あり
(本紙五行)
一多正文十二
丁六

銘文左丁

なり是虚偽に非ず實と故に眞實の本願なり此誓をは聞きはけて深心
する安心か眞實の信心なり夫とは念佛往生と云へは唯稱名のことな
りと心得て念佛往生と云とを嫌ふ人もあり好む人もあり口稱へかな
よる人は好み信にかたよる人は嫌ふなり二人なから病人なり只今の
禮讚の文祖釋の上か唯稱名はかりのことに非ず十聲の者も一聲の者も
往生す名號の謂れを聞く所にて命終る者も往生なり是か念佛往生な
り故に御文の中に第十八願の名を擧ぐるには念佛往生の本願とのみ
のたまへり是か大体禮讚証文の指南なり念佛往生と深く信する信心
か眞實の信心なり尊號銘文第十八の三信釋の下信樂釋に如來の本願
眞實にあるを二心無く深く信して疑はされは信樂と申すなりとあり
本願眞實を深く信するか眞實の信心なり其本願眞實とは即南無阿彌
陀佛なり元祖は不以餘行爲往生本願とのたまふ夫を今文にもろく
の雜行雜修自力の心をふりすてしとあり餘行を以て本願とせざるか

故に捨てねはならぬなり捨てるとは雜行雜修自力の心を止めるとなり
 唯以念佛爲往生本願故に一心に阿彌陀如來我等が今度の一大事の
 後生御助け候へとたのみ申て候とあり一心に如來をたのみたてまつ
 りて御助け候へとたのみは南無なり阿彌陀如來は所皈の如來なり阿
 彌陀佛に南無する信心なれば其体南無阿彌陀佛なり其南無阿彌陀佛
 かそつくり口に顯はるゝ所の稱名なれば一聲稱へて命終る者も十聲
 稱へて命終る者も往生なり三十年五十年稱ふる者も往生するなり往
 生の定まるはたのむ心の起る時なり然れば初一返の稱名から佛恩報
 謝なり行卷に念佛即南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛即是正念と二箇所に
 出たり如是明白な釋なり夫を念佛と云へは口稱と心縛ゆへに取り異
 へるたり蓮師も稱名念佛くとのたまふ心の憶念か口に顯るゝこそ
 念佛と云へ深く信せずして稱ふるは佛讀みと云ものなり斯く心得れ
 は元祖吾祖蓮師一軌の御教化なり本と善導の眞實の事理けか如是な

御自釋丁五及
 丁十

六要命本で
 は四三十一御
 自釋では十二
 丁三たり

り信卷に涅槃經を引て言眞實者即是如來とあり彌陀は即ち眞實なり
 然れば彌陀をたのむか即眞實の信心なり右の通り安心の根本を示し
 たまふ禮讚より元祖吾祖蓮師皆同じき故是より御文にかけて辨せは
 二帖目第九通に夫彌陀佛の誓ひましますやうは一心一向に我をたの
 まん衆生をば云何なる罪深き機なりとも救ひたまはんと云へる大願
 なりとあり是は六字なから如來の本願ぢやと教へたまふ趣きなり夫
 彌陀佛の誓ひまします様は南無阿彌陀佛の六字の誓ひまします相た
 はど仰せらるゝと一心一向に我をたのまん衆生をば二字の相なりた
 のまんどはたのむと云事なり云何なる罪深き機なりとも救ひたまは
 んと云へる大願なりとは四字の相なり是か如來の本願あり夫を末學
 に取り誤りて云何なる機の衆生なりとも救ひたまふはかりを本願な
 りと心得る者あり夫れては阿彌陀佛の四字はかりか如來の本願とな
 るなり言南無者の釋て云はし阿彌陀佛即是其行か選擇本願なり迂擇

本願と云時は六字なり故に南無阿彌陀佛の相を第十八願の相とのたまふ御文なり三帖目五通にされは一心一向に我をたのまん衆生をは必ず十人あらは十人なから極樂へ引接せんとたまへる他力の大誓願力なりとあり一心一向に我をたのまん衆生をはとあるか二字の相なり必ず十人あらは十人なから極樂へ引接せんとあるか四字の相なり夫を引き結んで他力の大誓願力なりとのたまへり他力の大誓願力か南無阿彌陀佛の誓願たのむ機も佛の方に成就と云とは是れて知れたり又四帖目第九通に阿彌陀如來の仰せられける様は末代の凡夫罪業の我等たらんもの罪は云何ほどふかくともわれを一心にたのまん衆生をは救ふべしと仰せられたりとあり阿彌陀如來の仰せられけるやうとは彌陀佛より衆生の方への仰せ付けられやうなり是か如來の勅命なり其勅命は我を一心にたのまん衆生をは二字の相たあり必ず救ひましますべし四字の意なり然れば六字なから如來の勅命なり

故に行卷歸命者本願招喚之勅命也とのたまへり爰の所を混濫すべからず又五帖目第一通に一心一向に佛助けたまへと乃至誓願の意なりとあり一心一向に佛助けたまへと申さん衆生をはとあるは南無の二字の相たなりたとひ罪業は深重ありとも必ず彌陀如來は救ひましますべしとあるは四字の相たなり是か念佛往生の誓の意なり念佛とは南無阿彌陀佛のとなり然れば一心一向に佛助けたまへとたのむは直無の機なり必ず救ひ在すは四字の法なり機法一体の南無阿彌陀佛にして是か念佛往生の誓願の意なり然きは佛にありても機法一体の南無阿彌陀佛なり上來御文は佛邊にある所の御教化なり今の改悔文は其如來の仰せに隨ふ相たなり此勅命に隨ひ受けたる相たを述る時は諸の難行難修自力の心をふりすて、不以餘行爲往生本願故に捨てねはならぬなり一心一向に彌陀をたのむは阿彌陀佛に離れぬ南無の信心なり然れば行者の受たる方も機法一体の南無阿彌陀佛なり其南無

御文は能教
教化は所
改悔は所

正定業

阿彌陀佛の信心がそつくり口に顯はるゝ南無阿彌陀佛の稱名なり是
か他力の信他力の行なり爰の所を末學の誤るなり三業などは爰を誤
るなり此義下去て辨せん上來所引の御文は如來の方の御教化なり此
改悔文は如來の勅命に隨ふことを述るなり此所を正信偈の本願名號
正定業至心信樂願以因の二句で心得べし上に所引の二帖目九通三帖
目五通四帖目九通五帖初通此四種は本願名號正定業の一句の意なり
今此改悔文は至心信樂願爲因の一句の意なり如是分て置くべし正定
業と申すは元祖並に吾祖の釋を伺ふに如來選定の業と決定業とを以
て正定業を釋したまへり如來の選定とは彌陀如來の方に選ひ定め
たまふ事を正定業と云此名號は人間天上へ生るゝ因に選ひ定るに非ず
又諸佛淨土へ生るゝ因に選ひ定るに非ず安養淨土へ生るゝ因に選ひ
定めたまふ名號なり此か如來の選定の業なり決定業と云は此名號を
信する者は十人は十人なから極樂へ迎ひ取らんと定るが正定業なり

御文安心聖
教安心

是か如來の本願虚に非ず偽に非ず本願眞實の教なり夫を今御文に一
心一向に我をたのむ衆生は云何に罪は深くとも助けやうと云南無阿
彌陀佛の相たなり是第十七願の意なりと本願名號正定業の一句て仰
せらるゝは諸佛の御手にありて右の通りに勤めたまふを祖師善知識
の教化へ移して勤めたまふなり至心信樂と云は本願眞實を信するか
往生の因とのたまふ意なり其至心信樂の相を唯今諸の雜行雜修自力
の意をふりすてゝ乃至たのみ申て候とのたまふ○問曰御文の中を見
るに彌陀の本願と申すは名號を稱へんものを極樂へ迎へんどの誓は
一箇所として勤めたまふ所なり殊に禮讚の若我成佛稱我名號の文は
元祖より眞影の銘に眞筆を下して吾祖へ授けたまへり夫を御文に一
箇所も念佛往生と云は我名を稱へる者を迎へ取るの誓なりと仰せら
るべきに其仰の無きは云何近頃は安心二になりて稱ふる者を迎ひ取
らうと云は聖教安心たのむ者を助けやうと云は御文安心と云なりと

云は不可なりや云何○答曰祖意測り難けれども先第十八願を取意して稱我名字の本願と初てのたのみは道綽禪師なり故に道綽師の讚に稱我名字と願しつゝ若不生者と誓ひたりとあり夫を善導相承して口稱本願なりと願したまふなり上に云ふ如く口稱本願と云へばとて只稱へることに非ず深く信して稱ふる口稱本願なり先此所は祖釋て大體すはりて御文の上を心得べし末燈抄證する所名號を稱ふと云ども他力本願を信せざらんは邊地に生るべし本願他力を深く信せん輩は何事にかは邊地の往生にて候べきとあり此釋の意は證する所名號を稱ふと云ども信せざる人なれば方便化土に往生し本願他力を深く信する人なれば眞實の淨土へ往生するとの指南なり然れば御文は本願他力を深く信する方を專にする勸化なり又稱我名字の誓を御文の中に願したまはざるは是を嫌ひたまふに非ず嫌はざる故に寐ても寤ても稱名念佛せよと進めたまへり然れば嫌ひたまふに非ず乍去口稱本

末燈抄二十
七丁

第十八願の
類ひ方

願の勸化の無きには其由あり其由とは全体是は所望不同なり第十八願を心得に就て觀經下々品を以て心得ると願成就の文を以て心得るとの不同あり觀經の下々品は第十八の乃至十念の講釋なり本願に乃至十念とあるは心で念するとやら口で念するとやら云何なるとやら知れ難き所を觀經の下々品に至て具足十念稱南無阿彌陀佛口に稱ふる稱名と云と夜の明けた如くになれり故に論註上終にも成就の文と下々品との文をは引き並へて問答決擇あり曇鸞の釋より見ても彌よく明かなり是をは先輩より申傳へり縛師は觀經の上へ大經を移して釋したまふ喩へは觀經の鏡の上へ第十八の鏡を移したるものなり故に大經に曰と票して第十八願を下々品の文と合說せり稱我名字と願しつゝ若不生者と誓ひたりと縱令一生造惡の衆生引接の爲にとての二句は觀經稱我名字と願しつゝ若不生者と誓ひたりの二句は大經第十八願と下々品とを合願したまふか導續なり善導は望佛本願と釋せ

り故に觀經の鏡を前に於て大經の鏡を後ろに置く第十八願の乃至十念の誓に望て見れば下々品は口稱本願を顯す經文となる如是道綽善導二師共に觀經の上に有りて大經の本願を心得る釋なり元祖此所を専ら推立てと勸めたまふなり人々の歎きは如來の本願を誠にするとは誰れも信すれども兎角稱ふる所に至りて散乱鹿動の心の中から稱へては云何で有らう燃立様な心中で稱へては云何そと危ふむあり貴ひ心は起らぬ機がしりになると云有り其ことを元祖は信する上は唯稱へよどのたまふ已か生れ付きの目鼻は取られぬとなり故に他流ては乃至十念も臨終の十念とし成就の一念も臨終の一念とするは觀經を以て第十八願を心得る安心故なり故に他流は物依三經別依觀經なり今家の意は願成就を以て第十八願を心得るなり全く信卷の御指南か然り事不預典君子所恥況んや凡夫か佛になるには私ては往かぬなり祖釋の指南て無ればならぬなり願成就を以て第十八願を心得るか祖

釋の意なり其願成就の意は信心往生にて深く信する時即得往生の利益を得るか成就の文なり此成就に乃至一念と有るを元祖は行の一念とするを吾祖は信の一念と決判したまふ一念の信心の所に即得往生の益を得るか願成就の文なり一念慶喜する人は往生必ず定りぬ此信心の上に稱ふる稱名は佛恩報謝あり如是成就の經文より第十八願を伺へば至心信樂欲生の信する所にて往生を定めたまふ其上に稱ふる稱名なれば佛恩報謝の稱名なり故に蓮師の勸めたまふ所は爰の所を全く相承したまへり故に只今此御ことばり聽聞申しは候事御開山聖人御出世の御恩とあり信心定る時往生又定まる願成就の大經安心と定め被下たは獨り御開山聖人一人御出世の御恩なり次第相承の善知識は何を相承なされたぞなれば大經安心を相承したまふ故に代々の善知識方も御文の如く信心決定す門末の者も御文の如く信心決定せよと御判を載せたまふなり斯く聞て見せば御文の中に稱我名字の

誓を述べたまふ道理は無きなり夫を信にかたよりて稱我名字を嫌ふは破ると云ものなりたのむ者を助け様と云も六字の謂れ稱ふる者を助けやうと云も六字の謂れなり信決定の上は寐ても寤ても稱へよと願成就の經文を以て教へる所の言南無者を以て勸めたまふ御文なりもろくの雜行雜修自力の心をふりすて止聞其名號信心歡喜の安心を述べたまふ次に大經安心を専らに勸めたまふ相承の御教化なりと申すとは辨し終る

御自釋二十
佛願の生起
本末

信卷末に聞其名號を釋して經言聞者衆生聞佛願生起本末無有疑心是日聞也とあり此名號をば無名無實に聞くに非す只大様に聞くに非す佛願の生起本末を聞はけ疑心無きか聞と云ものなり佛願生起とは本願の依て起る謂れなり此本願は何に依て起ると云に佛とも法とも後生とも菩提とも知らぬ我等凡夫を強ちにたすけたまはんが爲に起りたまへり故歎異抄に五却思惟の願をよくく案すればひとへに親戀

歎異抄三十
五丁

三願三放三
機三往生

一人か爲なりけりと教へたまふ我一人をたすけんが爲に起したまへる本願なり是か本願の起りなり佛願本末とは衆生攝化の願は十八十九二十の三願なり故に吾祖は三願三經三機三往生と分ちたまへり第十八願は正定聚の機にして難思議往生大經の意なり第十九は邪定聚の機雙樹林下往生觀經の意なり第二十願は不定聚機難思議往生彌陀經の意なり十方衆生をば此三願を以て洩れぬ機にと願したまふ故に衆生の機の色も二機四機に非す三機なり往生も三往生あり經説も二部四部に非す三部なり三經往生文類に具に指南あり然れ共其中に本末あり第十八願は本第十九第二十は末なり第十八願を建立せん爲に久遠寶成の阿彌陀佛法藏菩薩となりて此願を立てたまへり然を共第十八願へ入り兼ぬる故に大悲の願より洩るゝ者を洩らさじと第十九第二十の願を誓ふなり花嚴に所謂逐機の末教なり邪定聚の機も洩さじと第十九の願あり不定聚の機も洩らさじと二十の願あり是は皆非本

願なり如是本末を聞きはけて疑ひ無きか名號の謂を聞く云も乃なり故に今諸の雜行雜修自力の心をふりすてと云へり十九二十は末なり如來の本願に非さるとなれば捨てねばさる終なり雜行雜修は邪定聚の機なり自力は不定聚の機なり然らば如來の本願はと云へば一心に阿彌陀佛如來我等か今度の一大事の後生御たすけ候へば選擇本願の一なり其選擇本願と云は只此名號の一なり此南無阿彌陀佛の名號の謂れを聞きはけられた所か後生たすけたまへの信心なり其南無阿彌陀佛の名號の相たは南無の二字は一心一向に阿彌陀佛をたのみまいらする意なり阿彌陀佛の四字はたのみ衆生をたすけやうと云謂れなり雜行つとむる者を助けやうとものたまはず雜修の行者を助けやうとものたまはず自力念佛の者を助けやうとものたまはずたのみ者を助けやうとあるを聞きはけられたか後生たすけたまへなり此信心一で往生なり此信心の体南無阿彌陀佛故に夫がそつくり口に顯れ

もろくの
雜行雜修自
力と通解す

一多証文
七十
左丁

館文未
丁左

たれば佛恩報謝の稱名なり是か大經安心の意なり聞其名號信心歡喜て名號の謂を聞くより起る信心故に他力の信心と云なりもろくの雜行雜修自力の心をふりすてと止諸の雜行諸の雜修諸の自力と云となり一多証文に邪定と云は雜行雜修の方善諸行の人報土には無れはあり不定聚は自力の念佛疑惑の人は報土に無くと云なり文とあり自力と云は廣く渡る言なり雜行雜修も自力なり他方に對して自力と云なり故に尊號銘文に他力は義なきを義とすとあり義と云は行者のはからう心なり此故に自力と云なり文とあり他力とは行者の謀ひ無きを云ふ行者の謀ひは自力と有る故に雜行雜修に通する言なり然れども只今の所は一多証文の通り雜行雜修は邪定聚の機第十九の願の意觀經の意雙樹林下往生あり自力は不定聚の機第二十の願の意彌陀經の意雜思往生なり故に自力の念佛と云是は彌陀經の顯の義なり疑惑念佛とは大經の疑惑佛智なり和讃に誓願不思議を疑ひて

御名を稱する往生はとある意なり彌陀經には疑惑のとは説て無きなり執持名號一心不乱と説きたまへり故又自力念佛とのたまふ雜行とは正行に對す御文の意ては正行と云体は南無阿彌陀佛なり雜行をふりすて一心に彌陀をたのむが正行に歸したと云ものなり雜修とは專修又對す專修とは餘佛を念せず餘善を心につけず唯彌陀一佛を念して一向に念佛するが專修なり其專修の相手になるか雜修なり雜行とは和讃に心は一にあらねども雜行雜修是似たり淨土の行にあらぬをば偏に雜行と名けたりとあり雜行と雜修と意は一では無れども雜行雜修是似たりと云となり似るとは他流ては雜行即雜修にして別々に非す一にするなり我祖は二としたまふ化土卷に雜行雜修其言一而其意惟異文とあり其言一とは善導の疏迂擇集二行章の文面を見れば其言一なり然れども其意を推求するに雜行雜修異するとのたまふ意あり和讃ては雜行の行相雜修の行相似る故に一なりとのたまふ實

御自釋 四十
名 七十

正く雜行と
解す

御自釋 四十
七十

愚禿抄下 五十

丁 選擇集本 七十

に委曲せり善導の疏に行有二種一者正行二者雜行文選擇集二行章に依善導和尚意往生行雖多大分爲二一正行二雜行文とあり雜行と云は淨土の行に有らぬを雜行と云あり本より西方淨土へ往生する行に非されは雜行と云なり化土卷に自本非往生因種文とあり因種とはたねと云となり淨土へ往生するところのたねに非さきは雜行と云愚禿抄も之と同一二行章に雜者は純非極樂之行通於人天及以三乘亦通於十方淨土故云雜也文是は果雜なり縱令行は一色ても雜と名くるなり例せば皈依佛皈依法皈依僧の三皈の一行ても人間へ生れたひと云意て三皈戒を受くきは人間の因となる或は天上聲聞覺緣又は樂師の淨土へ往生したひと云意なれば樂師の淨土に往生する因となる然れば十方の因になる故に雜と云なり然れば西方極樂の行に非す(是果雜なり)又化土卷に雜言人天菩薩等解行雜故曰雜文此釋は能修の因雜にかゝる釋なり三皈戒を受けなから人天へ生れたひと修行すれば人天へ

御自釋 四十
七十

生る十方淨土と云安心なれば十方淨土に生る、なり然れば解行雜なり(是因雜なり)故に善導は疎雜の行と名けたまへり是が淨土の行にあらぬと云ものなり其行を西方淨土へ往生せんと回向すれば淨土の雜行となるなり只今五戒を持て人天へ生る、を夫を西方淨土へ回向すれば化土に生するなり乍去とても參るならば其雜行を捨て、眞實報土へ往生を遂げよと其相手か南無阿彌陀佛なり此六字は上にも云ふ如く正定の行業にして佛か人天へ生る、因にも選ひ定めたまはず淨土の眞中へ生る、因に簡ひ定めたまへし名號あり此名號を信するものを佛に爲やう此名號を稱ふる者を迎ひ取らふと誓ひたまふ故に此勅命に隨ふて一心に彌陀を頼むべきなり念佛成佛是眞宗とのたまふは此理りなり此雜行の行体は五正行の外皆雜行なり二行章に雜行無量不違具述但今且翻對五種正行以明五種雜行也文雜行の行体は無量八万四千の行体あり具に述るに違あらず但五正行に對して五雜行を

選擇集本八
丁

明すと云意なり應知

正く雜修と
解す

雜修と云は專修に對す專修とは一心一向に彌陀一佛を信して餘行餘善に心をかけず只南無阿彌陀佛くと專念するか專修なり雜修とは五正行を並修するを云ふ和讃に助正並て修するをば即雜行と名けたり一心を得ざる人かれは佛恩報する意なし文とあり並へてとは互格の如く五正行を並へ勤めるとなり極樂淨土の正因とあてがうて修するか雜修なり化土卷に助正兼行故曰雜修文とあり是は並へると云ふとは少しく義相違するなり兼役と云時は主とする役は寺社奉行なれども兼ては公事奉行を勤むると云如く主に兼ぬるなり今は稱名を主として兼て助業を修するか兼行の雜修なり一心を得ざる人なれば佛恩報する心なし一心とは誠どの信心なり誠どの信心とは如來の本願を信する心が一心なり雜修の行者は如來の本願を信せざる故に前三後一の助業を兼ね或は並へ修するなり選擇本願を信せざる人なる故

御自經四十
八丁

に佛恩を報する心は無きなり。一心を得たる人なれば佛恩を報するなり十三失の中ては相續して彼佛恩を念報せざるか故と云に當るなり十三失の中重きは此佛恩を念報せざる失なり故に此一失を擧げて餘の十二失を攝する我祖の和讃なり專修の人は一心を得たるか故に佛恩を報す佛恩報する故に十三失は獨り手に離るゝなり其心を今一心に阿彌陀如來今度の一大事の後生御助け候へとたのむ信心なり其時往生一定御助治定と領解したれば佛恩有り難たやの報謝の念佛なり此一心を得たる上から五正行を勤むるは皆報佛恩なり又和讃に佛號を旨と修すれども現世を祈る行者をは是も雜修と名けてそ千中無一とさらはる文と云へり佛號を旨と修すは專修なり然れども是は自力なり光明眞言や題目は稱へねども現世を祈る心なれば雜修なり佛號を旨とするは主にして現世を祈る心を兼ねるなり是も雜修と名けてそ千中無一と誠めたまふあり御文は多く此現世祈りの雜修を嚴しく

誠めたまへてあり上來和讃の上を辨す時俗の中に十三失なことを出して沙汰するものあり是れ祖師善知識を恐れざる了簡なり十三失を申しても宜ひとなれば和讃にも出したまふかなれども僅かに佛恩を念報せざるの失のみを出したまふ又御文の中にも十三失を擧げたまふ所は一ヶ所も無きなり十三失は六ヶ敷く容易ならぬとなり又僧分も愚俗に向て十三の失を彼是沙汰するとは用捨あるべきなり持名抄に雜修と云は同く念佛を申せども兼て他の佛菩薩を念し又餘の一切の行業をも加ふるなりとあり是は雜行を兼ねるを雜修と云ふ是は祖釋に見へ難きなり唯信抄に雜修と云は念佛を旨とすと雖も又餘の行をも並へ他の善をも兼ねたるなり文とあり此義は望西の選擇集大綱抄に圖を出して異説を示せり選擇集の上に於て心得へし(此雜行雜修は西鎮にもやかましく論することなれば良忠の鎌倉宗要等を見るべし)持名抄の雜修は祖師の意を云へは雜行の中に攝めらるゝなり雜行雜

正く自力と
解す

一多証文十
丁

丁

改邪抄末七
右

修これ似たりとのたまふは此等の謂ひ歟是は存師の一義なり
 自力とは一多証文に不定聚は自力の念佛疑惑の念佛の人は報土には
 無しと云なり文と云へり雜行雜修を離れて南無阿彌陀佛の一行を修
 するに就て自力他力あり致へされとも自然に真如の門に轉入すとあ
 りて自力念佛の人はいつの間にも他力念佛に入る程の場所なり夫
 を今自力念佛と云ふ其自力念佛と云はどの様な念佛と云に改邪抄
 に正定業たる稱名念佛を以て往生淨土の正因と謀らひ慕るすらなを
 以て凡夫自力の企てなれば報土往生かなふべからず文とあり稱名念
 佛を以て自身往生の業因と謀る心なれば自力の企なり故に御文にも
 自身往生の業とは思ふべからず文と云へり思ふは謀ひなり彌陀の方
 に選ひ定めし名號を凡夫の方から往生の業と思ひ謀らふは佛知を疑
 ふ罪なり下として上を謀るべからず親は子の心を計るべきなれども
 子の方から親計らふべからず預ねて上人の誠めは爰の所なりか様に

勤めたらは佛意にかなうで有らふと計らふは恐れ多し唯佛恩難有や
 と念佛すべし是覺師のみの指南に非ず化卷にも指南あり應披見二帖
 目第二通に夫彌陀如來一佛を深くたのみ奉りて自餘の諸善万行に心
 をかけず又諸神諸菩薩に於て今生の祈りをのみ爲せる心を失ひ又わ
 るき自力なんと云ふひが思ひをもなげ捨てしとあり此文の中初には
 自餘の諸善万行に心をかけずと雜行を捨てよとあり次に諸神諸菩薩
 に於て今生の祈りをのみ爲せる心を失ひと雜修を捨てよとなり後に
 わるき自力なんと云ふひが思ひをもなげ捨てよとなる成程只今愚夫愚
 婦に對して雜行を勤めよと云ても不勤只今佛になると云ても勤まら
 めなり然れども念佛はかりては助からぬ様に思ひ餘行に心が加ふる
 なり瞞へは法事などの節小經は短經ききは功德か少ないと思ふか様
 な心か捨て難き故に殊勝ぶるな生れ付の儘で助けたまふ程にと勤め
 たまふなり又念佛申ながらも神に心をかけ今生は神様後生は極樂と

云心か失せ難きなり故に雜修の心を止めよと勧めたまふなり和讃に佛號を旨と修すれども現世を祈る行者は是も雜修と名けてそ千中無一とさらはるゝと祖師の御言か直に彌陀の説なり是を上につく御文に誠めたまふなり次にわろき自力なんぞ云ふひが思をなげ捨てゝと自力とは信卷席に迷定散自力昏金剛真心定心念佛は息慮凝心の念佛なり散乱心を止めて心靜かに申せは尊しと思ふて稱ふるの定心念佛なり竹林坊靜嚴及明遍は専ら定心の念佛が宜ひと思ふよりして忘念の念佛は云何致さんと尋ねられしに元祖は夫は源空が力及は衆欲界散地に生れたる凡夫に心を靜めて念佛せよと云は生れ付きの目鼻を取れど云様なものなり散地の凡夫なれば散乱なから念佛せよと勧めたまへり散心の念佛は廢惡修善の念佛なり罪はいや名號は尊しと稱ふるのなり喩へは藥有り難しと飲めはよけれども藥と病とを並へて藥を飲むに病の治らんは云何と疑ふは病と藥とを並へる故なり今

も又然り罪と念佛とを並へて罪福信の心て稱ふる念佛ては罪を消さふと思ふ念佛なり念佛を稱へて淨土の生因と計ひ募る故に若存若亡の心起り念佛もまめやかに唱へらるゝ時は決定と思ひ念佛も倦き時は往生云何と思ふは如來の誓を信せざる故なり一者信心厚からずとのたまふは此心なり其を自力の心をふり捨てゝ已か計ひを止めたのむ者を助け様ふと云誓を信して決定往生と思て寐ても寤めても念佛申はかりなりと勧めたまふ今の所なり故に諸の雜行雜修自力の心をふりすてゝとのたまふすてゝとは捨の字なり捨は瘵の異名なり取上ぬことなり唯取る所は他力の信心一なり

一心と解す

一心に阿彌陀如來乃至たのみ申て候和讃に天親論主は一心に無尋光に皈命す文とあり御文ては五帖第二通に諸の雜行をすてゝ一念に阿彌陀如來今度の後生助けたまへと深くたのみ申さん人はとあり言の具畧はあれども全く同しとなり此外御文に所々に此の言次第を勧め

一心即一念
御自經三十
右

たまへり其一心皈命と云は淨土論の意一念皈命と云は願成就の經の
意なり論の一心と成就の一念と言異にして意全く同じ今の所は一心
皈命の相をあらはす一心皈命と云は論主の世尊我一心とある一心な
り三信即一の信心をば一心と云信卷成就の一念を釋する所に即ち論
主の一心と一念と全く一なりと御指南あり其文に日言一念者信心無
二故曰一念是名一心則清淨報土真因也文とあり此一念と云は信心の
とにして行の一念に非ず行の一念なれば念聲は一て口に顯す稱名の
となり今成就の一念の念は不然意なり故に信心のとなり唯念と云
はずに一念と云は二心無きが故に一念と云ふ二心とは疑の心なり善
見律三十三十九に狐疑者於見聞狐疑者二心也文とあり然れば彌陀を信
して少しも疑はぬ心を一念と云ふ此一念を論主は一心とのたまへり
尊號銘文に論主の一心を釋して一心と云は教主世尊のみことを二心
無く疑ひ無しとなり即ち是まことの信心なり文とあり一心とは二心な

銘文
丁八

一心相承

く疑の無き心なり是か即眞實の信心なり三信即一の一心なりと釋し
たまへり此一心は論主の一心とすはるべし此論主の一心をば曇鸞道
縛もろとも相傳へて一心淳心相續心と釋したまへり和讃ては辯師
の下に具に釋したまへ正信偈ては辯師の下に明したまへり是を善道
相承して一心専念彌陀名號と顯したまへり元祖上人此善導の一心専
念彌陀名號の文に依りて立所に淨土門に入りたまふなり此一宗を開
きたまふも此一心専念の文より起るなり應知此善導の一心専念の文
を一多証文に釋して一心は金剛の信心なり専念と云は一向専修なり
一向は餘の善に移らず餘の佛を念せず文とあり論主一心と判し和尙
一向と釋するところの明白なる吾祖の指南なり如是の相承の釋の上
より見れば唯今の所に一心皈命をのたまふは全く淨土論の一心皈命
なり是か即ち成就の一念皈命なり然るに祖釋の上に一念皈命とつ
けてのたまふ御言は見へ難きなり一心皈命と云御言はあり覺師存師

証文
丁六

に至りては一心皈命とも一念皈命ともものたまふなり只今は一心皈命の信心を迷るなり一心即皈命皈命即一心なり和讃に盡十方の無尋光佛一心に皈命するをこそ天親論主のみことには願作佛心とのへたまへ願作佛の心はこれ度衆生のこゝろなり度衆生の心はこれ利他眞實の信心なり信心即ち一心あり一心即ち金剛心金剛心は菩提心此心即他力なり文と云へり此展轉釋て一念皈命の信心と云ふと更に異論なし一心に皈命するをこそ改めて此か願作佛心なり度衆生心なり眞實の信心なり金剛心なり菩提心なり此か他力信心なりと祖釋を曲ぐるとはならぬなり御文の上ては八十通ながら一念皈命か信心なり先二三を出たさは一帖目第三通に一心に二こゝろなく彌陀一佛の悲願にすがりて助けましますと思ふ心の一念の信まことなれば文とあり誰か見ても口上に頼むとは非す助けましますと思ふ心の一念の信まことなればとわれは一心即皈命皈命即一心なり一帖目第七通の眞宗

他方回向の
信

再興の相たを顯す御文に二心なく彌陀をたのみたてまつりて助けたまへと思ふ心の一念起るとき文とあり明白な御教化なり乍去吾賢くて信するに非す頼むに非す彌陀他方回向の信心なる故に今の信力に依て御助けありつると云へり他方回向の信心の御教化は一帖目第十五通に何のわつらひもなく彌陀如來を一心に頼みたてまつりて其餘の佛菩薩等にも心をかけずして一向に二心なく彌陀を信するばかりなり是を以て信心決定とは申すものなり信心と云へる二字をはまこととの心と讀めるなりまこととの心と云は行者の惡き自力の心では助からず如來の善き御心にて助かる故にまこととの心とは申すあり文と云へり一向に二心なく彌陀を信するか信心決定なりとあり次に信心と云二字をはまこととの心とは讀めるなり其信する心をまこととの心と讀むは他力のよき心なるか故にまこととの心と讀なりと之は全く覺師の御指南に據りたまふ最要抄に信心歡喜の信心を釋して此信心をはま

この心と讀む上は凡夫の迷心に非ず全く佛心なり此佛心を凡夫に授けたまふとき信心とは云はるあり文とあり誰か見ても動かぬ様に指南したまへり時に彌陀の實の心をは凡夫に授ける時信心と云はるいと云其凡夫に授るは何の時に授ると云に是か肝要なり中には十劫の昔も授けたまふを玉かけなから迷へこそすれと云是れは聖道門の理談へかゝる事なり他流ては如是申せども當流ては不然何時授かるやと云に聞其名號の位に授るなり故に最要抄に我が賢くて信する心に非ず聞其名號と云ふ聞とは善知識に遇ふて如來の他力を以て往生治定する道理を聞き定むる聞なり文とあり然れば名號の謂れを聞き分けられたか信心歡喜なり夫れか後生助けたまへと頼む心なり是れか頼むものを助けやうと云六字の謂れを聞き分けられた後生助けたまへの心なり是れでもまだ心得仕兼終る故に又最要抄に經釋の聞其名號の理はりを引て云經釋已に聞を以て證要とせられたり能く聞く

○阿彌陀如來成就の講解は附録七頁に出
行体の南無皈命と信心と云理由を述す

所にて往生の心行を獲得する條顯然なり一るべし文このたまふ是れ玉かけなから迷へこそすれではなへ應知故に今の文に我等か一大事の後生御助け候へとたのみ申て候と云へり玉かけながらでは無きあり信樂開發して聞く所に授けたまふなり故に聞か即ち信心なり右の通りなれば他力の信心と云とは能くく聞くへたり然れば助けたまへと頼むは信心なり口上に述ふる場へ至らず假令心じやと云てからが六字の謂れを聞分けた上に此方から助けたまへと運ふ皈命に非ず名號の謂れを聞分けた心かそつくり助けたまへの信心なり是は下に至りて辨せん○問曰南無阿彌陀佛は其体行なり御文にも南無阿彌陀佛と云へる行体と云へり然るに南無と頼むを信心と云は何に依りて左様に釋したまふや○答曰此義肝要なり南無阿彌陀佛は行体なり行体の南無歸命を信心と云とは合点行き難し然れども私にのたまふに非ず善導の言南無者の釋の意で行体の南無皈命を信心と勸めたまへ

り御一代問書に云法敬坊安心の通りはかり讃嘆する人なり言南無者の釋をはいつもはづさず引く人なり夫さい指よせて申せと蓮如上人御掟候なり文とあり難有御指南なり指よせて申せとは言少くきに云へと云ふ事なりいかさま愚婦の者には南無は皈命又是發願など云ひ皈命と云は斯く心得ると發願回向は斯く心得るとなど云ても合点行かぬなり言すくなに云へとのたまふ其言すくなと云は頼むものを助けやふとあるか名號の謂れなり如來の誓なり夫を聞き開ひたが信心なり安心なり是れが其まゝ後生助けたまへの意なり是より外に指寄せて安心を勤むるとは無きなり是れ御一代書問のみ又非す御文始終此の意なり先四帖目第十四通一流安心の体と云と南無阿彌陀佛の六字の相たなりと知るべし文とありて次に言南無者を引き釋いたまふ約る所は頼むものを助けやうと云勤化なり故に言南無者の釋より仰せらるゝとと落ちつくべし次に道理を云ふへし其道理とは

阿彌陀佛即是其行に對する南無歸命なれば理として信心なり夫を行とは云はれぬなり當流では悲願の信行なり信と行とは如來の御誓ひを申すなり是れより外は無きなり阿彌陀佛即是其行とあれば南無歸命は信心なると明かなり吾祖の歸命の釋は順仰と云釋なり如來の勅命に隨ふが歸命勅命に順ふが信心なり彌陀の仰を信順するか是信心なり其仰とは南無阿彌陀佛の六字なり其六字は頼むものを助けやふと云謂れなり其頼むものを助けやふと云ふ勅命に順ふ心か直に助けたまへと頼む信心なり六字の謂はれを聞きはけたが直に如來を頼む心なり然れば南無歸命は信心なると明白なり然れば言南無者の釋に依りて南無は信心なりと心得べし四帖目第一通抑當流に立つる處の他力の三信と云は第十八願に至心信樂欲生我國と云へり是れ即ち三信とは云へとも唯彌陀を頼む所の行者歸命の一心なりとあり御文では更に彼れ是れは無ひ三信と雖も唯彌陀を頼む所の行者歸命の一心

異安心の起るは他家安るに由る

能信所信

と云へり時南無歸命か助けたまへの信心と云とは今家のみに非す西鎮にも云へり然れ共其意は三家共に異なるなり悲哉其他流の義今家の末學に混す今更の事に非す餘程古しへより有るとなり雖川源澄鳥浴之濁末流と云如く御本山の源は清みきりて有る安心なれとも流の末を濁らすは末學の者の爲業なり何を以て濁すなれば他流の安心を以て濁すなり夫は其の管なり先善導の疏を講するにも西鎮の末書あり當流の末疏も有れども皆安心にくせのある人の末註なり末疏を見すに講釋は出來ぬあり偶々末註と云へは西鎮の安心を交へて書きたものなり喩ひは詩を作るに一句は玉維体で作し一句は李白で作ると云如く是を心得た者に見せると一句々々異ふなり今又然り故に末學此所て迷ふなり然れは今家の安心の一段に於ては祖釋は勿論覺師存師蓮師明白ある故に恒常之を拜見すべきなり時に言南無者を改悔文へかけて釋して辨せは南無歸命は能信なり能歸なり阿彌陀佛即是其

行は所信なり所歸なり即是其行は選擇本願之れなりと行卷並ひに銘文の指南なり選擇本願の体南無阿彌陀佛の行体あり此行体は万善万行の惣体なればいよく頼母敷なりと御文にも云へり是れを和讃に選擇本願信すれはと云ひ或は彌陀の本願信すれはと云ふ然れは阿彌陀佛即是其行は所信なり南無歸命は能信なり五帖目第六通の御文に彌陀を頼みたてまつる行者には等どのたまへり然れは阿彌陀佛は所歸なり南無歸命は能歸なり南無阿彌陀佛の相たは云何と云に助けたまへと頼むものを救ひたまふ謂はれなり此謂はれを聞分けた心か後生助けたまへと頼む心なり然れは我が賢くて信するに非す南無阿彌陀佛の回向の信心なりと教へたまふあり名號の謂れを聞分けたときそつくり如來の實心をもらひ受くるが佛智不思議なり是れが爲めに彌陀は五劫の思惟永劫の修行なり此れが如來の誓願不思議なり信は願より生すれば念佛成佛自然なり信心は如來の誓願より起るなり云

何なる理けで信するやを云何なる理けで聞き分けるやら實に佛の誓願不思議なり是を善導は彌陀智願海深廣無涯底と云へり云何なる理由で助かるやら唯佛與佛の知見なり是れが即名號不思議なり故に佛智不思議を頼むべしとも本願を頼むとも名號不思議を頼むものたまへり恒沙塵數の如來は万行の少善さうひつゝ名號不思議の信心をひとしくひとへに勸めしむ諸佛の勸めは只此理はりのみなり行卷に云攝取不捨故名阿彌陀佛是名他力とあり論註には佛力住持即入大乘正定之聚と云へり然れは一心に無尋光に歸命すると云ふは佛力をたのむ心なり念佛衆生攝取不捨の彌陀を頼むはかりなり是れを淨土論には觀佛本願力と云へり佛とは是れ盡十方無尋光佛なり本願力とは因位の本願なり故に吾祖は銘文に他力とは如來の本願力なりと示したまへり盡十方無尋光佛と云は攝り取りて捨てたまはさる故に阿彌陀と云ふ是れか他力となり故に願力不思議の信心とのたまふ御文に

御自釋 九丁
論註上 一丁
左

御自釋 廿三
丁 右

は不可思議の願力として佛の方より往生は治定せしめたまふとあり願力とは因位の本願なり力とは果上の神力なり別物に非ず論註不虛作住持の釋明かあり然れは此の彌陀佛をたのむより外に助かる道は無きあり只たのめよろづの罪は深くとも我本願わたのちがひの有らん限りは眞如堂の如來の告けたまふは爰の理りなり只たのめ我本願の有らん限りは助けやふとなり四帖目第六通に夫南無阿彌陀佛と云は念佛行者の安心の体なりと思ふべしと六字ながら安心の体と云へり信卷には至心則是至徳尊號爲其体文と三心即一心故に三心の体か丸るゝ名號なり所皈の阿彌陀佛か南無の機を成する故に六字ながら法なり阿彌陀佛の四字か行者の機に非ずと思はんとを恐れて撰擇本願是れなりと顯したまふ六字か即是其行なり六字ながら法なり南無の機を成した選擇本願の行体なり行者の方に於て助けたまひとたのむ信心も阿彌陀佛に離れざる故に六字ながら信心の体なり然れは六字ながら法

なり佛にありても機法一体なり行者にありても機法一体なり其六字
か安心の体にして夫れがそつくり口に浮む南無阿彌陀佛なり故にた
のむも稱ふるも六字と指南する言南無者の釋なり夫れて蓮師は取り
誤らぬ様にむつかしう云な指しよせて申せと法慶坊への御物語りは
我々への御示なり思慮せよ

我等とは罪惡生死の凡夫無有出離之縁の我等なり人の後生に非す
我が後生なり今度とは此度ひ此次生に佛に成るとなり此教へに依り
て助からずんは何れの時か生死を出てん二帖目第二通に無善造惡の
我等か様なる淺間しき凡夫かたやすく彌陀の淨土へまへりなんずる
爲の出立なり此信心を獲得せずは極樂には往生せずして無間地獄に
墮在すべきものなり文然れば一大事の後生なり此御文をやもすれ
は他宗の人は此の信心を得ぬ故に地獄に落つると誤れり是れ念佛無
間と云人より尙を壹重をもき罪なり上人其様な無理なをのたまふ

我等とは何
者と指すか
と述ふ

後生と解す

○此の下附
録八頁と對
照すべし

略文釋 七下
右

一大事

道理は無ひ上人の仰せは無善造惡の凡夫は万行も勤まらず雜修も自
力も無く惡は遣すどころも無く有るか様な我等は此信心を得ぬと無
間地獄に墮つるぞなれば我等に於ては未來は地獄か極樂か一つ二つ
の所なり是程の一大事は無きなり文類聚抄に若也此廻覆蔽疑網更心
逕歴曠劫多生文とあり此度本願の御手より洩るれば又地獄巡りなり
一大事とは法花方便品に唯爲一大事因縁故出現於世文とあり法花を
指して一大事因縁とのたまふ佛になるとを一大事でござります法花
の一乘を一大事因縁と仰せらる佛になる大法を惣して一乘と云夫て
法花も出世本懷なりと云淨土教ては稱讚淨土經に爲利益安樂大事因
縁說誠諦語文とあり本願一乘の御法を利益安樂大事因縁と説けり我
等も只今は如是凡夫なれとも此度本願力に助けられて佛になる一大
事の後生なり今生ては佛になる事はかなはねとも次生に願力に助け
られて佛になると故に我等か今度の一大事の後生と仰せらるゝなり

一どの無二の義て二つなひと云と並ひのなひとを一と云佛になるとは並ひのなひとなり大とは勝れた義を云大きとなり小さいとはなひとなり次生に人天に生れると或は聲聞緣覺にあるとならば小なり今度の淨土往生程の大きな勝れたとは無きなり事とは極樂淨土に往生することが事なり必ず極樂へ参りて美しき佛になるべきなり實に一大事の後生なり大經には雖一世勤苦須臾之間後生無量壽佛國快樂無極文と爰に後生の文字出てたり淨土に往生して樂み極まり無き所が一大事の後生なり又此度は地獄に墮すると極樂に往生するとの事故に是れに過ぎたる大事は無きなり善導臨終正念譯に世之大者莫越生死一息不來乃屬後生一念若錯便墮輪廻文とあり成程生死の境なり晝夜息數一万三千六百息あり一息來らざるは早や後生なり一念誤れば輪廻に墮す只今彌陀の本願に洩れたれば三塗に墮するなり世に大事は多けれども淨土に往生するか往生せぬかの死に生きの大事なり

たのむたす
けたまへと
解す

○たのむた
すけたまへ
の講はまへ
に詳
設す

其所に臨終正念譯の教誡にあづかり我人も云何せん雜行は勤まらず悪は飽くまで造る然るに爰に阿彌陀如來我を一心にたのむ者を助けんとある本願の誓なり然れば夫を力にするはかりなり其本願の謂はれを聞き開かれた心こそ助けたまへの信心なり

阿彌陀如來我等か今度の一大事の後生御助け候へどたのみ申て候止たのむとは皈命の意なり是れから改悔文の御言に就て種々法義安心筋乱るゝ處なり先正意の教化通りを落付けて置くべし若合点行き難き所あらは幾度も相談に預ります四帖目第十四通に歸命と云は衆生の阿彌陀佛後生助けたまへと頼み奉る意なり文とあり然れば御助け候へどたのむは歸命の相たを述べたまでは治定なり故に和讃にも盡十方の無尋光佛一心に皈命するをこそ天親論主のみことには願作佛心とのべたまへどたのたまふ此歸命の御言に助けたまへどたのむ意は云何様ある所に依りてのたまふやと云に是れは蓮師の私に非す推し

渡りて云へは佛法始めて已來歸命と云は助けたまへとのむ意なり
然れども先祖釋の上より心得て置くへし行卷に飯字の字訓を出した
まふ所に歸説也説字稅音又歸稅也説字稅音悅稅二音文とあり是れは
飯の字の訓にはあらねども飯説飯稅と言を成する文なり斯く熟する
所てたのむと云意の存することを知らせたまふなり説の字にはせつ
ゐつぜいの三音あり其中に於て悅稅の二音を出したまふ文類二門偈
の未註等に此據を考てあり歸悅の文字は維麻經疏に卒土之人民莫不
飯悅文とあり飯稅とは詩經に心之憂矣於我飯稅文とあり註に稅猶舍
息文とあり舍息とは宿り所住み所にする意なり噓へは浪人者は宿り
所も無し住み所もきし其浪人か主人とりたれば其の主人を宿り所
住み所とするなり其時は浪人に非す只主人をたのみに力にするな
り今も無善造惡の我等宿り所も住み所も無く今にも命終れば三界六
道の浪人者て已か業に引かされて何れなりとも行かねばならぬ宿り

所も住み所も無い浪人なり御文に抑男子も女人も罪の深からん輩は
諸佛の悲願をたのみても今の時分は末代惡世なれば諸佛の力にては
なか／＼かなはさる時なり丈夫れては諸佛の力は宿り所住み所にな
らぬなり然るに獨り彌陀の誓願は我をたのむものを助けやうとの本
願故に此佛を宿所住所にするばかりなりもはや助かる所の手段の已
に盡きた我等なり極惡深重の衆生は他の方便さらになし海に舟の如
く病人に藥の如く赤子に母の如く大海に向ては智慧ても學問てもら
ちあかぬ船てなければ渡らぬ重き病人には藥の力であければ治な
ぬ只今生み落ちた赤子は母も非されは育つことならぬ今日の我等か
爲には彼の阿彌陀様は海に船病人に藥赤子に母の如く此佛の本願を
離れては助かる所か無き故に此佛をは宿所住所にするはかりなり故
によりたのむたのみよると左訓したまふ然れは此佛を力にするより
外は無きなり故に助けたまへとのめとのたまふなり總して内典に

は歸依と續きたのみよると云意なり今行卷は字訓を出す所故に外典の語を取り皈説皈税の訓を出す此れに依て左訓はたのみよるよりたのむの意なり然れば力にする意を皈依と云歸依佛歸依法歸依僧と云は佛は助け救はんともある大丈夫なる故に是れを力にする意る故に此佛へたのみよると云とて歸依佛と云ふ歸依法歸依僧も例して知るべし然れば佛法僧の三寶は必ず救ひ助る三寶故是れに歸依する心は助けたまへの心なり況や彌陀はたのむ衆生を必ず救ふべしとある誓故に此佛にたのみよる心は助けたまへの心あり故に歸命の字に付て助けたまへとたのむとと御文に勸めたまふは蓮師の私に非ず行卷の字註よりのたまふと知るべしさて佛法始て已來皈命と云は助けたまへと云意とは是れは大婆娑論但舍論等の論藏にしばし其釋あり婆娑論は五百の阿羅漢の寄り集まりて註釋したまふ論なり其婆娑論に南無は救濟の義なりとあり嘉祥法花義疏四ノ下に云南無者歸命也救我也

歸命はたす
けたまへの
意に云こ
は佛家の
格

文とあり皈命はたのむと云となり救我とは我を救へたまふと云となり珍しひ事では無へ天竺ても漢土ても日本ても助けたまへとたのむなり然れば梵の南無を日本の語にすれば助けたまへと云となり漢の皈命の語を日本の語にすればたのむと云となりたのむとは父をたのむ母をたのむと云ときは力にすること佛をたのむと云は佛を力にするとなり然れば現世のとをたのむに非ず後生のことをたのむなり後生と云ひながら後の世に人天へ生れたへとたのむに非ず一大事の後生佛になるとをたのむのなり他人の後生ではなひ我等か今度の後生を助けたまへとたのむなり如是たのむは我が賢くてたのむに非ず六字の名號の謂はれを聞き分けた心が助けたまへとたのむ心なり其体は信心なり故に如來の勅命に隨ふを皈命と云彌陀の勅命はたのむものを助けんと云勅命なり其勅命に隨ふ心は助けたまへの信心なり是れが聞其名號信心歡喜の安心なり然れば一心即皈命皈命即一心なり

申して候の
普に就き異
解者の見解
の分る、こ
とを示す

申して候とは一類の末學の了簡には三業皈命と云をを教へて此改悔
文にも三卷の註を書きたり明和年中に越後の三業頼意業頼の争論の
時分三業頼は昔越後の國に作り出せる法義なりと御裁許書に見ゆ此
改悔の註は餘程古しへのと見ゆ改悔の註者は不退院の圓策と云人
なり其書を見るに具には無けれども三業皈命の事を申してあり其意
を只今畧して辨せば一心と云は心に助けたまへと思ふことなり故に
御文に助けましますと云ふ心の一念の信とあり又後生助けたまへと
たのむは口上に顯はして頼むことなり意の皈命を口に顯はして助け
たまへと云なり委くは下のたのむ一念の所にて可辨淨土論の一心と
云ふは心に助けたまへと思ふ事なり皈命盡十方無尋光如來とは其体
南無阿彌陀佛の行なり行なれば口に佛助けたまへとたのむこと、心
得るか昔の三業皈命の勤めなり

意業頼は一心と云は信心の事なり後生助けたまへと頼むは皈命なり

一心と云は信心の体を顯す疑の無き心か一心なり皈命と云は信相な
り疑の無き相と云ときは助けたまへなり信した上に助けたまへと思
を運ぶが意業頼の安心なり三業意業共にたのむと信するとは同した
のむが信心なり信心がたのむなりと云て同時の所なれども同時の前
後あり意業者は信した上に助けたまへの心が起るなり助けたまへの
上に信心起るに非ず本願を疑はざる心の上に助けたまへの念相あり
と体相を分つなり三業者は同時にして信するなりたのむなり然れど
も信した上にたのむに非ずたのむ後の信決定なりと云今の改悔文な
どか左様に見ゆる心に助けたまへと思ひ口に顯はしてたのまんに上
如是たのむ一念の所に往生一定御助け治定の信決定なりたのむ後の
信決定なりと心得るか三業頼の安心なり時に申して候とは三業者は
會通は入らぬ唯文の通りに口に助けたまへと申すと云なり意業者
は是れを種々に通釋するなり近來猶更申すの字を種々云なり昔の會

通は頼み申すと云言あれば口上に非す意なりと是れはいやと云へず
 後生皈けたまへと申して候とあれば口とも云はるゝかなれどもたの
 み申て候とあれば意なり末代無智の御文は佛助けたまへと申さんと
 わりてたのみの言を畧して有る故に口上とも云はれぬ意とも云はる
 ゝ故に六ヶ敷けれども改悔文てはたのみ申すとあるからは口上に非
 すと云氣を付けて見れば意にかゝるなり
 口稱頼は一心とあるは信心あり阿彌陀如來と云は即阿彌陀佛なり後
 生助けたまへとば南無なり申すとは口に稱ふることなり故に一心に
 南無阿彌陀佛と稱へることにして是れが善導の一心専念彌陀名號な
 り一心専念は第十八願の有りの儘なり一心が即ち三信なり助たまけ
 への念佛か乃至十念なり故に口稱者は佛恩報謝を嫌らふなり意業口
 業は朱紫相混し紫の朱を奪ふの類ひにして意業者は願成就の文に親
 しま様なり口稱者は一心専念の釋に當る様なれども言同じくして意

異なるなり故に心得誤らぬ様にすべきなり別して明和年中に越後の
 三業意業の者への裁許書を誤まり口稱を慕るは惡むべきなり
 法体頼は能機を拂らふなり行者の方に心をして一心に成られよう行
 者の方に心をして一念に成られやうと佛に一心一念を懸けるなり名
 目を付けて云は、正覺の一念往生の安心なり是れは西山家の安心な
 り阿彌陀如來とは我を助けたまふ佛なり心にたのむ人は阿彌陀如來
 と心で呼び出し口に南無阿彌陀佛と稱ふる人は言で彌陀を呼び出す
 なり我を助ける佛を呼出して往生を佛へ渡す意にて助けたまへと佛
 へ往生を渡すなり衆生の往生を受取らふと云佛なり夫れを佛へ渡さ
 なんだ故に今迄迷へ來れり今後生助けたまへと已か計らひの盡きた
 所か佛へ渡すのにて渡したあとは何にも無へ受取た彌陀の捨てたま
 ふ筈は無へ喩へは背に灸をすへたへと思ふても後ろには目は無く手
 は回いらす人の背に非す我か背なり人の病に非す我か病なり病を持

ちながら仕方無きなり然るときは灸をすへる醫をたのみ背を渡すは
かりなり渡した上には彼れ是れは無ひ今も又然り後生の一大事は只
阿彌陀様へ渡すが後生助たまへなり夫れを信するの疑はるゝの杯と
云は未だ己か手離れをせぬのじやと云なり此外法体頼は種々あるか
り斯く見れば改悔文も左様に見ゆるなり先右の通り異解者の心得を
出して次に一々行き届かぬ事を可辨御正憲は聞其名號信心歡喜の安
心なり名號の謂れを聞き分けた所か後生助けたまへの信心なり一心
即皈命皈命即一心たのむなり信するなり信するなりなのむなり別は
無ひ名號の謂れを聞き分けた心か後生助けたまへの安心なり
申して候是れは手似葉の辞なり此改悔文の中に申すの字多し意ども
口とも云はれぬのがあるなり然れば爰は何の事も無ひたのみまじふ
と云となり私日頃善知識の勸化を聞きた通りに彌陀をたのみまして
ござると祖師の前て領解をあげるなり口上なれば申し候とあるべし

正しく申して
候と解す

申してとあれば口上では無きなり此申してとあるての字先輩の了簡
にはたのみ申し終りて候と云となり例せばあひ見ての後の心にくら
ぶれば昔は物を思はさりけりと此あひ見てのての字は終りてと云こ
となりと云何にも然かり詮する所は申すと云字に就て意業か口業か
と云争ひはいらぬ事なり御文を見るに申すの辞有るは少く無きは多
し御袖の御文八万法藏の御文に助けたまへとのみ申すとあるは意
にかゝるなり末代無智の御文に佛助けたまへと申さんとある故に古
來意口争ふ所なり是れはたのみと云語を畧せる故なり退き考ふべし
御文の御教化か是れは口業是れは意業と云様に兩端に分れ様管はな
し申すは手似葉文字と知るべし手似葉は所に依て心得ねはならぬ詮
する所は申すの字に就て意の語のと云論は入らぬなり助けたまへと
云は口上なりや意なりやと云が肝要なり此義は淨土論等にて數々申
す通り助けたまへとたのむは一念皈命の信なり口上に顯す時は人々

皆知る一念と云べし然るに初一念は只佛のみ知る御文にもたのむ機は阿彌陀佛の能く知るしめす所あり文と云へり御一代記に一心にたのみ奉る機は如來の能く知るしめすなり彌陀の只知るしめす機に心中を持つべし冥加を恐しく存す可きとにて候との義にて候文と誠めてあり然れば信の一念故に口上に非すと云と知るべし夫れを口上の様に云は他流の安心の紛れ込んだのなり○問曰上來の如くで能く聞こへたり然るにたのみまして御坐ると云時は初にたのんだ覺へが有ればこそたのみまゝと云に非すや若又たのんだ覺へは無れどもたのんだと云なれば何に依て知るとを得るや○答曰口上たのみでは此難は聞こゆ先達て彌陀をたのんだ覺へが有る故なり御正意はたのんだ覺への無きをたのんまゝと云故に心得難し爰の所は云何と云に先道理を云べし我身に初一念の起る時の覺への有らふ筈なし其故は等覺の菩薩ても一念發起の信心は知れ難し一心彌陀をたのむ心の起

るは唯佛與佛の知見なり佛の知るしめす所は現量にして無分別智なり無分別智なれば云何して覺への有らふ筈なし初一念はさてをき寐ても寤ても憶念の心常にして忘れざるを本願たのむ決定心と云へる憶念の心さへ覺への無きなり心の内に尊とく思はるゝは起行の念なり夫故に續かぬなり思ひ浮ふ上から忘れる常に忘れぬが憶念の心なり此憶念の心すら覺へ無きなり況んや初一念に於てをや云何なる宿善やら只不思議と信するはかりなり然れば初一念の起りたは何時知れると云に報土に往生すれば知れる娑婆に居る間は佛で無き故に汝が信心は何月何日に得たと云事は知れぬなり藥にてをつる瘡すら何時とりついたやら知らぬ況や初一念をや知れぬ事を知りたるが故に六ヶ敷きなり○問曰若然らは何に依てたのみましたと申し逃るや○答曰只今雜行雜修自力は勤まらず只此彌陀を力にするはかりなり故に頼みまゝと云奇り云何なるたのみ云何が佛を力にする心ぞと云

にたのむ一念の時往生一定御助け治定の了解にすはりたが彌陀をたのみ申したと云ものなり夫は云何と云に往生定まるるしには慶喜の心をこるなり慶喜の心をこるしには佛恩報する思ひあり初一念の起りし覺へは無れども只今御助治定と存して難有やくと喜ぶ心より推して見れば一念たのむ心ガ起らずんば佛往生を定めたまふべからずたのむ心ガ起りたればこそ往生一定と佛定めたまふなり佛の方より往生を定めたまふ故御助け治定の了解になれり故に寐ても寤ても憶念の心常にして念佛申すなり是より見れば一念如來をたのんだに相異は無きなり○問曰道理は聞へたり然るに何に依て御助治定とすはるや○答曰是れか如來の本願なり六字の相たは南無の二字は彌陀をたのむ機なり阿彌陀佛の四字は助けたまふ法なり是れが體な証據なりたのむ一念の時往生一定御助治定の領解にすはりた其体南無阿彌陀佛なり夫かそつくり口に浮む稱名なり故に願成就の文に

聞其名號信心歡喜即得往生住不退轉と説きたまへり南無阿彌陀佛の六字が証據なり釋迦の金言なり諸佛の証人あり彌陀釋迦諸佛の教へをは祖師善知識其まゝ傳へたまふ故に祖師の教へび直に如來の仰せなり善知識の教へか佛の勅命なり此趣きをすはりて喜ぶが彌陀をたのむ人と云ものなり故に吾祖の前に出でゝもろくの雜行雜修自力の心をふりすてゝ乃至申して候と申し上る言ばかりで云に非す心の内がたのむ一心の時往生一定御助治定と落付き此上は佛恩有難やと念佛し喜ぶなり

たのむ一念の時往生一定乃至喜ひ申候此一段は佛恩報謝を述る一段あり上は安心爰は領解を顯す一段なり御助治定と存しと云存の字が肝要なり安心と云は彌陀をたのむが安心なり領解と云は其彌陀をたのむ心の落付様を云なり彌陀をたのまぬ者は一人も無し別して淨土門での西山鎮西九品長樂寺と數多に分れたれども彌陀をたのまぬ者

○報謝段
存の字々眼
なり

上の一段及
びのむ一念
の時等の文
を成就の文
に配す

は有る筈なし皆彌陀はかりを信したのむなり或は十却の昔に往生を
定めたまへりと領解する心で彌陀をたのむもあり又臨終に來迎にあ
づかる時往生を定めたまふと領解する心で彌陀をたのむもあり此は
當流の安心に非ず當流の安心領解と云はたのむ一念の時往生一定御
助け治定と領解する趣なり如是大体すはるべし當流の御勸化は一途
なれども末學の私を以て心得る故に安心か種々ある様なり經文て分
て心得る時は上の安心は聞其名號信心歡喜の意なり今此一段は即得
往生住不退轉の意なり是れには前後は無ひ同時にあるなり和讃て心
得る時は十方諸有の衆生は阿彌陀至徳の御名を聞き眞實信心いたり
なはたほきに所聞を慶喜せん是れか上の安心の意なり若不生者の誓
故信樂まことにときいたり一念慶喜する人は往生かならず定りぬ是
れが今のたのむ一念の時往生一定御助治定と存しと云に當るなり和
讃二首一連て一時にあると心得べし御言を經文に配せはたのむ一念

眞要抄本九
丁

の時とは即の字に當るなり即はたのむ一念の立所と云と往生一定と
は一定の言は得の字に當るなり得は定まると云意なり御助治定は住
不退轉の意なり和讃を以て此意を見よ信樂まことにときいたり一念
慶喜する人はと云か即の字に當る往生必ず定りぬと云が即得往生の
趣きなり即ち釋云必定とある指南の意あり和讃と今文と符節を合せ
たるが如し是れは乍恐眞要抄の御言を取りたまへたる今の一段の文
なり眞要抄に即得は即ち得となり即ちと云は時をへだてず念をへだ
てざる義なりされは一念皈命の解了立つ時往生やかて定まるとなり
得ると云は定まる意なり文とあり一念皈命の解了たつ時とあるを今
の文にたのむ一念の時どのたまへり往生やがてとは即の字の意定ま
るとは得の字の意なりたのむ一念の時其儘往生定まると云ことなり
此義の本は祖師の指南なり行卷言南無者の釋の所に經言即得釋云必
定即言由聞願力光闡報土眞因決定時冠之極促也文とあり此釋より伺

御自釋
右七丁

へは只今の頼む一念の時と云は即の字の意なり由聞願力とはたのむ者を助けやうと云願力を聞き開かれたがたのむ一念の立所なりまこと往生定まる時の極促を顯す所を報土の眞因と云なり報土の眞因はたのむ一念の信心一つなり其眞因決定する時冠の極促を顯すが即の字なり是れが平生業成の意なり御助治定とは住正定聚住不退轉の意なり論註に佛力住持即入大乘正定之聚正定即是阿毘跋致文と全く此の意なり御文に一念發起入正定之聚とも釋しとあり論註を指して釋と云へり佛力住持とは攝取不捨を顯すなり正定聚即不退轉なり然れば攝取不捨の故に正定聚に住するを御助治定と云なり嘆異抄に信心の定まる時に一たび攝取して捨てたまはざれば六道に輪回すべからず然れば永く生死をへだてそかし文能く聞へる指南なり四帖目一通に佛の心光かの一念皈命の行者を攝取したまふ其時節を指して至心信樂欲生の三信とも云ひ又此意を願成就の文には即得往生住不退

論註上丁一

嘆異抄二十
七丁

轉と説けり文と云へり此御言に意を付くべきなり一念皈命と云はたのむ一念の時と云所なり攝取したまふ其時節をさして等と云所が御助けを云なりたのむ一念の時御助けとはたのむ一念の時攝取にあづかるとなり其攝取にあづかる時を指して本願には三信と云是れが彌陀をたのむ所の安心なり此意を願成就の文には即得往生住不退轉と云へり彌陀をたのむ心起るなり即ち往生定まるなり往生定まるなりたのむ心起るなり又三帖目第一通されは一念皈命の信心の定まると云も此攝取の光明にあひ奉る時尅を指して信心の定まるとは申すなり文と云へり攝取の光明にあひ奉る時尅は三千世界を尋ねても一人も知る者は無きなり唯佛與佛の知見なり攝取の光明に預かる時が知れぬ時は信心の定まる時も知れ様筈なりさて只今御助治定と云所が住不退轉の意なりと云は私に非ず蓮師の指南あり御一代記に正定聚の方は御助けありたると喜ぶ意なり滅度の悟りへの方は御助あらう

御一代記丁十

存の字と解す

するとの有難さよと申す意あり何れも佛になると喜ぶ意よと仰せ候なり文と云へり然れば御助治定と領解するは住不退轉の意なり存とは心に思ひ定むると字典に在也察也とあり存在と云て心に定めなくとなり察は觀察て心に明かに思へ定めるとたのむ一念の時往生一定御助治定と心に明かに思ひ定めるとを存と云なり言に云とに非す心へかゝると故領解と云ふ是れが他流に異なる所なり梵麻那國王經に夫欲食美當存念十戒文と是れは好味を食ひたへと思はし佛の十戒を存念すべしとなり是等の存念と云は心に明かに思ひ定むることなり今も存念いたし候と云ことなり○問曰何に依りて思ひ究むむるや彌陀はものをのたまはずたのむ一念の時往生一定御助治定と往生ほどの一大事を云何して思ひ極むるや○答曰其証據は南無阿彌陀佛の六字なり彌陀をたのむ安心なり阿彌陀佛に南無する安心あり其の者を助けんとあるが南無阿彌陀佛の謂れなり佛のものをのたまふよ

云何して往生治定と思ひ究むるやを証す

御一代記十六 丁七

りは慥かなり是れには偽りは無ひ佛かものをのたまへは若しは天麻の業さならんと疑ひも起るけれども六字には偽せは無きなり御一代記に一心に彌陀を疑ひなくたのむはかりにて往生は佛の方より定めまします其支証は南無阿彌陀佛よ此上は何事をかあつかふべきぞと仰せられ候文とあり彌陀をたのむはかりで往生は佛の方に定めたまふ証據は南無阿彌陀佛なり是れか聞其名號信心歡喜の領解なれば疑は無きなり名號の謂れはたのむものを助けやふと云謂れなり其謂れを聞き分けられた了解なれば往生一定御助治定と夜の明けた如くに心に思ひ定まるなり其上に御一代記に此上は何事をかあつかうべきと仰せられ候とあれば此上に免や角とあつかう事は無きなり然るに今彌陀をたのんだと云とを坊主が聞て夫て往生決定と印可すれば喜れしや我往生も治定と落付くなり是れ坊主の印可が証になるや又南無阿彌陀佛を証にするが可なるやたのむ時攝取の光明に預かりたと

云とをも知らぬ凡夫の云とを眞實にして南無阿彌陀佛の本願が眞に
 ならぬと云は心得誤りなり故に上人は此上には何事をか取りあつか
 うべきぞとのたまへり三帖目五通に我等を阿彌陀佛の助けたまへる
 支証の爲に御名を此南無阿彌陀佛の六字に顯したまへるなりと聞こ
 へたりと云へり我等を彌陀か助けたまへる明かな証據の爲に六字を
 顯したまふなり八ヶ條にも我等往生の定りたる証據なりと云へり此
 を疑はんとを恐れたまへて十方の諸佛は証據に立ちたまふ故に善導
 は就行立信就人立信と云とをのたまへり十方の諸佛の証據に付ても
 信發る此を就人立信と云ひ又南無阿彌陀佛に付ても信は起る是れを
 就行立信と云故に釋尊は聞其名號信心歡喜即得往生住不退轉と説き
 たまへり此の大經安心を教へたまふが祖師聖人なり彌陀か祖師とな
 りたまへたは此安心を教へんが爲の出現なり是れを増せず減せず相
 承したまふ善知識の淺からざる御勸化か只今の安心領解の御言なり

眞安心と辨
 破す
 三業頼と破
 す

此様に領解しなる上に唱へる稱名は御助ありがたやの念佛なり蓮師
 は毎度無我になれとのたまふは爰の所なり我執をは離るれば明白な
 御教化なり上來文面終る

次に異安心の趣を簡畧に辨せは不退院の改悔の錄に一念皈命を心に
 置く時は一心なり口稱にはこゝ時は行の一念と云是れは心に助けた
 まへと思ふは一心なり是れを信の一念と云口稱に運ふ時は言へ顯し
 て後生助けたまへと頼む時は行の一念なりと云是れか他流の安心を
 以て當流の流の末を濁すものなり鎮西は南無は願なり行なりと云て
 心に助けたまへとたのむは願なり口に南無と稱へるは行なり故に南
 無は願なり行なり然るに善導は南無は願なり阿彌陀佛は行なりと云
 へるは云何と云に願と同時に起る行故に南無は願なりと云へり例せ
 は作願門と云如し作願は行せれども願と供なふて起る故に願と云な
 り近くは玄義分の傳通記が然り是れ西鎮爭論の所なり此鎮西の義に

或人の義は同じきなり心に助けたまへと思ふは願にして信の一念口に助けたまへと云は行の一念なりと信の一念行の一念と云とは祖釋の名目なれども如是き信行一念と云と未だ見ず全く鎮西の意なり又一義に一心と云は因願の三信の意後生助けたまへと口稱に運ぶは善導の加減の文の稱我名字の意に當ると云へり加減と云は第十八の三信を零して稱我名字の一句を加へるなり此意は心に助けたまへと思ふも信心口に助けたまへとたのむも信心と云意なり是れは西山の義なり西山ては稱我名號下至十聲を第十八願へ配當して下至十聲は乃至十念稱我名號の一句は三信なりとす故に西山は口に助けたまへとたのむを信心と云なり此領解を持ち込んで口上にたのむが信心と云なり猶其次に六要を引けども六要は三業たのみの安心に非ず篤と考へ見るべし其上に又一念彌陀に皈命する三業悉く行者の所作なれども阿彌陀如來を増上縁とす等と此三業頼を他力の信心と云とは圓策

の私なり後に之を改めて口稱頼となれり甚たの誤なり實に智者に笑はれ愚者を惑はすと云ものなり祖師は稱我名字を下至十聲へ付けて示したまふなり証文銘文等を應披見先つ祖師に違するの失あり且つ道理に當らず願成就の一念を信の一念と究めて信心定る時往生又定ると云祖師の決判なり然るに口上に後生助けたまへと頼むが行の一念と云時は今文にたのむ一念の時往生一定御助治定とあるは行の一念とすべし祖師の流れを汲む者云何でか之を行の一念と云とを得んや甚た悪ろき了解あり信行不離と云はんかなれども祖師は行不離信不離行で聞其名號信心歡喜の安心故に行不離の信心一つで往生なり信不離の行なるが故に信心が其まゝ顯はるゝ稱名なり末燈抄に此御誓を聞て疑かふ心の少しも無きを信の一念とは申すなりと云へり彌陀の誓を聞て少しはかりも疑の無きが信の一念とあり口上にたのむが信の一念と云祖釋は無へ口に稱へるは行とこそそのたまへり特に

一念と云は往生治定の時尅の極促を顯すとのたまへ彌陀より外に知る者の無へ唯佛與佛の知見の一念なるをのびくしく我も知り他も知る口上にたのむを信の一念と云は智者に笑はれ愚者を迷はす料簡なり三業皈命は起行なり今は安心なり是れが不退院の三信合行の安心にて御本廟制禁の安心なり明和年中の越後法義争論の裁許書にも其國は祖師の舊跡もあるに已前より三信合行と云事を勸むるは言語道斷ありと呵りたまひてありさて三業者の安心約まる所はたのむと信するとは同時なれども同時の上には前後ありたのむ後の信決定と云へり故に今も一心に後生御助け候へとたのみ申したれば其たのんだ時往生一定故に御助治定と決定して其上は佛恩報謝と次第を見るなり當流の正意は不然上の安心は聞其名號信心歡喜にして名號の謂れを聞き分けた意が直に助けたまへとたのむ意なりたのむ一念の時往生一定御助治定は即得往生住不退轉の意なりたのむ一念の時如來の

意業頼と破す

御助けの治定と決定して南無阿彌陀佛と申すなり言に次第あるに似たれども皆聞其名號の時に具はりて前後なきなり是れ成就の經文の意なり
 意業頼の信心は体なり皈命は相なり信する上に助けたまへとはこの意あり夫れの覺へは無けれどもしかと無ればあらぬなり信するのみにてすむとなれば唯一念とあれば可なり夫れに一念皈命の信心と云へり又一心とあればよき所に一心に皈命せよとのたまへり今も一心に後生助けたまへとたのむなり然れば深く信することのみ云ては能皈の相は立たぬ信した上に助けたまへの念想は是非起らぬはならぬなり是れが意業たのみのすはりなり一寸見れば文相に契なふ様なれども甚だ誤りなり成程体相と云は聞こゆれども信した上に頼む念相を起す様と云は体に離れたる相となる故に自然に自力頼の穴に落ちて他流の安心と全く同じきなり御正意は不然体に即する相なり例せば

水の性は濕性なりつめたひは水の相なりつめたひと云のは水体に即する所の相なり体に離れたるに非すつめたへと思ふ故につめたへに非す水体に具はりてあるつめたへの相なり今又然り名號の体に即する助けたまへなり名號の体に離れたる助けたまへの謂れに非す然れは聞其名號信心歡喜の立所にそつくり助けたまへの一念あるなり元來他流の安心は喩へは阿彌陀佛の方を的にして助けたまへの矢を射込むちり西鎮の安心は然かなり先鎮西なれば心存助給口稱南無阿彌陀佛なり與の御書の通り心には助けたまへ口には南無阿彌陀佛助けたまへ南無阿彌陀佛と彌陀に向ふなり臨終まで然り別に助けたまへと思はずとも南無阿彌陀佛に助けたまへは離れぬと云安心なり彌陀を的にして助けたまへ南無阿彌陀佛の矢を放つなり西山の安心は助けたまへと云たれば助けやふとの彌陀か直にそこへ願れたまふ是れが機法一体なりと云今家は不然今日衆生の胸を的にして佛の方より

我をたのむ者を助けんと射あてし被下なり佛の方よりたのめ助け機法の南無阿彌陀佛と射あてし被下故に助けたまへの信起るなり是れか聞其名號信心歡喜の安心なり夫れを吾祖は仰せに願ふを皈命と云とのたまふたのむ者を助け機と云勅命に答へたが後生助けたまへなり是れが他流の今家と異なる所なり三業意業は他流の如く佛を的にして衆生の方より助けたまへの矢を射込みたれば他力の中の自力なり全体西山の安心の混し入りたるなり西山は行と云は所皈の佛体か往生の行なり阿彌陀佛の四字は佛体なれば行なり阿彌陀佛の四字は所皈故に己方方には無へ夫れを煩らはしく行者の方に具する杯と云は機の三業なりと云が西山の義なり意業頼は此方から助けたまへと阿彌陀佛に向ひ奉り所皈の佛体は助けたまふ佛なり夫れで機法一体なりと機と法と出合ふて機法一体と云なり夫れでは機法一体を載南無の機と阿彌陀佛の法と体二つになるなり喩へは見臺に書物を載

せ九様なのなら御文は不然一休不離なり佛に有りても行者にありても機法一休六字なから機なり法なり願なり行なり紛れぬ様にせよ四帖目第十四通に南無の二字は衆生の彌陀をたのみ機の方なり又阿彌陀佛の四字はたのみ衆生を助けたまふ法なるが故に是れ即ち機法一体の南無阿彌陀佛と申す意なり文とあり此文を見るべし南無の二字は衆生の彌陀をたのみ機の方なりとあれば阿彌陀佛に離れぬ南無の機なり阿彌陀佛の四字はたのみ衆生を助けたまふ法なり南無の機までも法の方に成就したまふ故に一念たのみ機を他力の信心と云はるゝなり佛にありても機法一体の南無阿彌陀佛なり行者へもらへ受けても機法一体の南無阿彌陀佛なり阿彌陀佛に南無する安心故に夫れがそつくり口に顯はるゝ六字なり是れが衆生の淺間しき煩惱の心を的にして佛の方より他力の信他力の行を與へたまふと云當流の御教化なり然るに三業意業は所皈の佛体が往生の行と云故に祖釋に相違

御自釋左
六丁
餘文未左
二丁

するなり吾祖は言即是其行者即選擇本願是也とのたまへり選擇本願と云は南無阿彌陀佛なり行卷銘文に釋あり可見如是明かな祖釋の有るをさしをき他流の佛体即行を今家へ引き込むは云何祖門に衣食し祖師の養育にあつかりながら即是其行は選擇本願是也とあるを戻ひて佛体即行を寫るは甚た誤りなり當流の御教化は佛体の徳を名號の中に攝り是れが所信なり所行なり所皈なり一念たのみ心の起る時殘らず行者へ與へたまふ故に信するも行するも他力と云なり故にたのみ一念の時往生一定御助治定とのたまへりたのみ一念の時大利益を與へたまへたまはこそ往生一定御助治定とすはるあり此すはりて南無阿彌陀佛と稱ふる故に口も心も一つなりとのたまふ上來三業意業の筋異ひを辨し終る

口稱願の科簡には心に助けたまへ口には南無阿彌陀佛とたのみなり此の心得ではたのむ一念の時と云は南無阿彌陀佛とたのみ一念の時

口稱願と破

こ申す意なり此了解は即ち鎮西の心存助給口稱南無阿彌陀佛と申す安心と全く同じ鎮西では心に助けたまへと思ひ口には南無阿彌陀佛と稱へ臨終まで助けたまへ南無阿彌陀佛と云あり此鎮西の臨終までと云を最初一念に心得る迄でなり故に口稱家は初一念の南無阿彌陀佛を信とす鎮西の安心に同するのみに非ず昔より嫌らふ所の一念九念の異安心に同するなり南無阿彌陀佛とたのむ一念の時往生す其上の稱名は佛恩報謝なりと理として最初一聲の稱名は彌陀をたのむ所の念佛なり初一邊は正定業其の後は報謝と二つに分けるが一念九念の異安心なり本山に於ても御制禁の安心なり故に口稱願の人は和語燈の法然上人の御言の文面を能く契なふ様に覺へる故に報謝を嫌らふなり彼の越後の國の圓策は初めは専ら口上だのみで教へたれども后には口上だのみを稱名へ持ちかへて南無阿彌陀佛と一念たのむ時往生すと申したり即ち南無阿彌陀佛と稱ふるは行の一念なるを信

心と云其故は信の方へ屬する行故に体は行なれども信と云意なり心の助けたまへる信の一念南無阿彌陀佛とたのむが行の一念故に信行具足と云なり後又手をかへて如是勤めたり是れ甚だ誤りなり併しながら御言の上に南無阿彌陀佛とたのむと云とは元祖吾祖蓮師にちらく見ゆるなり此の意を篤と心得べし末燈抄に南無阿彌陀佛とたのませたまへて助けんとはからはせたまへたるによりて文と云へり此の御言正像末讃の終り自然法余の中に出でたり此たのませのせの字はからはせののせの字は他力を顯すなり往生の因も他力往生の果も他力なりと示す自然法余の指南なり南無阿彌陀佛と唱ふるとをたのませとのたまふ然れば口に南無阿彌陀佛と稱ふるは吾祖の指南故に申す事なり此言云何が心得べきやと云に明和年中越後争論の時裁許書に右の言を取り誤らぬ様に示してあり其意を取りて只今辨せは末燈鈔に南無阿彌陀佛とたのむとあるは口と心と一なりと教へたまふ

指南なり名號の謂れを聞き分けた心が阿彌陀佛に南無する他力の信心なり其信心がそつくり口に顯れたる南無阿彌陀佛故に南無阿彌陀佛とたのむとのたまふ口と心と一つなりと云指南にて信行不離の法門を述べたまふ御教化なり信行不離を論ずるに就て体に就て論ずると相に就て論ずるとあり体に就て論ずる時は信心の体も南無阿彌陀佛にして夫れが口に顯はるゝ念佛なり喩へば氷が全く波となるが如し波は外の者に非ず水が全く波なり是れ体に就ての不離なり相に就て論ずる時は信心の相は疑はぬが信心の相あり如來の誓を聞き疑はぬ所を信と云行と云は一聲をも唱へ十聲をも唱へ命有らん限り唱ふるが行なり故に信心を行とのたまはず口に稱へる稱名を信心ともなたまはぬなり然れども信を離れた行に非ず行を離れた信に非ず喩へば水は静まりて平坦なる形が水なり水が動ずる所が波の相なり水を波とも云はず波を水とも云はず水は水なり波は波なり然れども水

を離れたる波も無し波と離れたる水も無し波の全体が水なり全く不離なり末燈抄に信行不離をのたまふは相に就ての不離あり水と波と二と聞けども水を離れたる波も無し波を離れたる水も無し信と行と二と聞けども行を一聲するぞと聞て疑はねは行を離れたる信は無しと聞て候又信を離れたる行なしと思召すべしとあり是れが末燈抄の意なり又御文の御教化は一体不離の邊に就てのたまふなり心の信心がそつくり口へ顯はるゝ稱名なり其信心の体は南無阿彌陀佛なり氷の体が全く波となるなり御一代聞書にされは信を得たる体は即ち南無阿彌陀佛なりと心得れば口も心も一つなり文どのたまへり信心を得たる体は即ち南無阿彌陀佛なりと領解して見れば口も心も一つなりとのたまふとなり四帖目第十一通に抑南無阿彌陀佛の体は即ち我等衆生の後生助けたまへとたのみ申す意ありとあり阿彌陀佛に後生助けたまへと頼む意が南無阿彌陀佛の相たるが故に夫れがそつくり

り口に顯るゝ所の南無阿彌陀佛なり唯今の改悔文で申さは頼む一念の時とは阿彌陀佛に助けたまへと頼む意なり其時往生定まるなり是きが信の一念なり夫をそつくり口に浮む稱名なり然れは心と口と一つなりと心得たれば心に頼む信心が口へ浮む稱名故に南無阿彌陀佛と頼む意と口と一つなりと知れと云御指南なりさもあるべきなり故に願成就の文には聞其名號信心歡喜の所で即得往生の利益を得と説て頼む一念の所に無上大利を與へたまふ意故に御文にも一念に彌陀を頼み奉る行者には無上大利の功德を與へたまふ意を和讃に聖人の曰五濁惡世の有情の選擇本願信すれば不可稱不可説不可思議の功德は行の身にみたり文と云へり信する一念に大利無上の功德を與へたまふ經文なり行を離れぬ信故に信心一で往生なり又彌勤付屬の經文に具有得聞彼佛名號歡喜踊躍乃至一念當知此人爲得大利無上功德と説て有るは一聲の所にて無上大利を具足するとなり和讃にも阿彌

陀佛の御名をさゝ歡喜讚仰せしむれば功德の寶を具足して一念大利無上なりと云へり一念大利無上とは行の一念なり一聲の所にて万徳備はると云ものなり是れが行卷の指南なり信の一念の所にて大利を具することはりを述べたまふは信卷の指南なり故に信心一にて往生す爰を以て正信偈に正定之因唯信心とのたまへり又信不離の行なるが故に一聲の所にて万徳具はる故に稱ふるのみにて往生と勤めたまふ極重惡人唯稱佛とある之れなり正信偈中に唯佛とも唯稱ともあり然れは信不離行行不離信なり是れより見れば心の信心がそつくり口に顯はるゝ所の稱名なるが故に末燈抄を初めとし蓮師に至るまで南無阿彌陀佛と稱ふるは彌陀をたのむことのためは信行不離の御教化なるが故なり南無阿彌陀佛と頼む一念に往生一定と心得れば祖師の信の一念に即得往生とのたまふを戻かぬ安心になるは心に心得誤るなど裁許したまへてあり此裁許書が世に傳はる故に其意を得ぬ人

は取り誤るなり故に教誡の大体を辨せは先年越後の争論は久唱寺は
口にたのむと云とは無へと云方なり云は、意業頼なり了専寺が口に
助けたまへと頼むが一念皈命なりと云三業頼なり是れは二人共に信
行別執の病人なり意業頼は心にたのむが信心なり口に南無阿彌陀佛
と唱ふるは別なりと心得るなり故に口に顯して頼むと云とは全体無
きとなりと云なり又了専寺は口に顯して助けたまへとたのむが信心
其上には南無阿彌陀佛と唱ふるとなりと云なり是れ信と行と二なり
と心得るなり若信行一ならば口に助けたまへと云はずして心の信が
口へ顯はるゝ所の南無阿彌陀佛と云べし信行各別の流義の流義故に
裁許書には信行不離の良藥を授けたまへり心の信が口に顯るゝ稱名
故に夫れが頼むと云ものなりとのたまふ御慈愛の御示なり久唱寺が
口にたのむとは無ひと云も誤りなり又了専寺が口に顯はして助けた
まへと頼むと云も誤りなり心に頼むがそつくり口に顯はるゝ稱名なり

上來信行不離の裁許書辨し終る然るに口稱頼の人は是れぞ時を得た
りと心得て南無阿彌陀佛とたのむ時往生一定御助治定と心得る是れ
は所望不同なり此改悔文並に御文は願成就の經文の意信卷の安心な
り往生の業事成辨するは信心の所なり信心定まる時往生又定まるな
り元祖も建立二種信心決定九品往生也とありて信心定まる時往生又
定まると云思召なり深く信して稱ふる深く信する所にて往生定まる
是れが行を離れぬ信なり口に南無阿彌陀佛と唱ふるは信を離れぬ行
なり然るに口稱者は世の中に寒ひと云は心に思ふ故に口に寒ひと云
同時なり心に信する故に口に南無阿彌陀佛と唱ふ同時なり故に南無
阿彌陀佛と唱ふる時往生一定と云なりと是れ誤りなり心に寒ひと思
ふ故に口に寒ひと云ふ心に信じた故に口に南無阿彌陀佛と唱ふは信
を離れざる行なり今願成就の文は行を離れざる信なり是れが望め所
が違ふと云ものなり今聞其名號信心歡喜と説き彌陀の名號稱へつゝ

信心實に得る人はと云は此行を離れざる信の所で往生定まるなり故に只今頼む一念の時とあるは彌陀を信する一念の時往生一定なり然るに信行不離の教化が業事成辦の所へ持ち出し様ぐ違ひ願成就の安心を勸むる所へ當流の信を離れぬ行を持ちかける故に口稱慕となるなり法体頼は頼むと云とは如來へ渡す意手離れをする意なり至心信樂已を忘れてとある教化は已が計らひを止めるとなり然れば已が手を離れ彌陀へ渡すはかりなり心に信心をもらひ受くるなと云は煩はし我が心には妄念のみ起るなり故に後生助けたまへと佛へ渡すはかりなり其時往生なり其往生の体は南無阿彌陀佛なり南無阿彌陀佛は法なり其相は拜み上ぐる阿彌陀佛の相たなり後生助けたまへと如來へ渡したきは向に南無阿彌陀佛の佛体が則ち往生を受取りたまふ我方に何にも無きなり其佛体を見て嬉しや南無阿彌陀佛と稱ふるはかりなり(此所に口稱を慕る法体あり口稱を慕らざる法体あり)逆惡の凡夫

法体頼と破す

佛心凡心一

を其まゝ助けんとある大悲へ助けたまへと渡すのみにて渡した所で受取りたる相たが南無阿彌陀佛の佛体なり已が方には惡心のみにて何にも無ひ時々佛体を見て嬉しやと念佛する喻へは酒屋の看板を見て飲みたへと思ふが如し佛の相たを見て已が往生の全体なり嬉しやと念佛するなり是れが法体慕なり今謂是れは西山の安心の紛れ込みたる安心なり二帖目九通にまことに宿善の開發に催されて佛智より他力の信心を與へたまふが故に佛心と凡心と一に在る所を指して信心獲得の行者とは云なりとあり此の御言の中宿善開發に催されてとは遠慶宿縁の意なり五劫永劫の修行の時より衆生を我か淨土へ生れさせずは彌陀になるまへと縁を結んで被下た數限り無き宿善の開けた所が彌陀をたのみ心なり是れも他力なり只今は佛智より被下るゝ他力あり聞其名號信心歡喜の所に佛心を行行者へ與へたまふ故に佛心と凡心と一になるなり凡心は凡夫の惡心なり三毒の凡心と佛の誠

の心と一になる所を信心獲得の行者と云なり善導の二河白道の喩正
 信揚の雲霧の喩が是れなり貪瞋煩惱はとはく起れども實の信心は
 彼等にもさへられずと泥中にある信心故に彼等にもさへらさずとの
 たまふ然るに行者の方に何にも無へと云は誤りなり四帖目第八通に
 當流の信心決定すと云体は即ち南無阿彌陀佛の六字の相たと心得べ
 きなり文とあり信心決定の体は今の如くたのむ一念の時往生一定御
 助治定と心得たるが六字の相たとのたまふなり相は体を離れたる者
 に非す体に即する所の相なり火の熱いと云は火の体に即する熱ひな
 り水も又然りたのむ一念の時往生一定と心得たが六字の相たなれば
 体に即する相なり故に報恩講三ヶ條御文には南無阿彌陀佛と云は念
 佛行者の安心の体なりと思ふべしとあり然れば佛より回施したふ所
 の信心なり貪瞋煩惱の心の内に彌陀を頼む心の起る時往生一定と云
 領解か南無阿彌陀佛の相たなり夫れがそつくり口に顯はるゝ稱名な

り時彼の一念の時往生治定すと云体南無阿彌陀佛と云は西山の安心
 なり四帖目第四通に我等一切の往生の体は南無阿彌陀佛と聞こへた
 りとあり是れが法体頼の証據にする御文なり是れは先輩の傳へに此
 の御言は上よりの意を受けて結ひ止の文なり我等一切衆生の往生成
 就せし体は南無阿彌陀佛と云とありと傳へり實に左あるべし會通す
 るとは随分出来るけれども今家は本願名號正定業とも南無阿彌陀佛
 の行体とも云なり然るに往生と云時は果の方なり淨土へ生じ終りた
 所を往生と云なり然れば今の所は往生成就せし体は南無阿彌陀佛と
 聞こへたりと云意なり我等が往生を定めたる体は南無阿彌陀佛と聞
 こへたりと云となり得は定なりとの意で解すなり上來三業意業口業
 法体是等の領解は一念頼む体は南無の二字とのみ心得る安心なり只
 今の所なればたのむ一念の体は二字と心得助けたまふは四字と心得
 たり祖師善知識の御教化はたのむ一念の体六字あり助けたまふ法も

此上の稱名
等の御言と
解す
○此の下附
録十一頁已
下と對照す
べし

六字なりとのたまふ其義云何と云に信卷に三信の体は名號なりと云へり御文には南無阿彌陀佛と云は念佛行者の安心の体なりと云へり又當流の安心と云は只南無阿彌陀佛のこゝろなりと云へり他流は南無とたのむは行者の方に起る故に体自力なり然れども他力より起る自力故に他力と云是れは通塗の他力なり喩へは狐が付きたれば歌をうたはぬ者か歌をうたひ夜行せん者が夜行する如く又佛力を加へたまふ故に説法すると云様な通塗の他力なり今家は不然南無の機まで法の方に成したのむ者を助けやふと云六字ながら佛の本願故に我等是れをもらひ受けたれば他力の信他力の行なり上來異解者はたのむ一念の体の二字と見祖師善知識はたのむ一念の体六字と見たまふとを辨す能く可思

この上の稱名は御恩報謝と喜ひ申候文此上とは即得往生の上の稱名は佛恩報謝なり此報謝のとも未學に色々申すとなれども只今は祖

最要抄五丁
左

易行品八丁
左

師善知識の相承の上のみを可辨本願の乃至十念の稱名は如來の御誓にして選擇本願の行なり彌陀の乃至十念は報謝の誓とは云はれぬけきども即得往生の上から振りかへりみをは佛恩報謝の稱名なり三信の上の稱名なれば報謝にして如來我が往生を定めたまへるとの難有さに稱ふる念佛なり佛恩報謝のとは何れに出てあると云に正信偈に唯能常稱如來號應報大悲弘誓恩とあり是れが佛恩報謝を勤むる文なり此の正信偈を口傳抄最要抄等に引て佛恩報謝の理はりを勤めたまへり最要抄に曰信心歡喜乃至一念の時即得往生の義治定の後の稱名は佛恩報謝の爲なりとあり本願抄も然り故に御文三帖に此の正信偈を第六通第八通の二ヶ所に引けり然れば相承明白あり是れ全く祖師始てのたまふに非ず其本は十住論に此意あり故に正信偈には龍樹の下に出でたり易行品に曰人能念是佛無量力威徳即時入必定是故我常念文とあり此論文の三句十五字をは正信偈には憶念彌陀佛本願自然

即時入必定の二句にしたまへり憶念と云々眞實の一心なり又論文の是故我常念の一句を開て唯能常稱如來號應報大悲弘誓恩の二句としたまへり龍樹の即時入必定の上に常に念する稱名は佛恩報謝なり是れを佛恩報謝と云とは大論七四曰譬如大臣特蒙恩寵常念其主菩薩亦如是知種々功德無量智慧皆從佛德智恩重故常念佛文此の文の中初に喩を擧げて大臣の主君の恩澤を蒙りて有る故に常に主君を念するは身に着居るも住するも主君より恩を蒙りて居る故なり菩薩も亦復爾り種々の功德とは大利無上なり無量の智慧とは一念の信心なり此の信行を如來よりもらひ受けて居る故に何の造作も無く悲願の信行を得たる許りにて命終る次第無上涅槃の証を開く實に山よりも高く海よりも深き恩あり故に常に念佛す此の大論の文を安樂集に引用なり故に此安樂集を信卷末に引て佛恩報謝の趣きを示してあり此大論の文より易行品の文を窺へは往生定り一上に唱ふる稱名は報佛恩の營

安樂集下四

六要五十四
丁右

みなり雜修十三失の中にも不相續念報佛恩故とあり此の失と反顯すれは專修なり專修の人は相續して佛恩を念報するなり元祖の弟子平原親(選擇集の序を書きし人)より右の禮讚の文を擧げて聖人にも七万返の念佛を唱へたまへ源親も弟子の一分故に數多の念佛す皆報佛恩と心得たりと折紙に記して元祖へ上げたれば其時元祖の仰せに一分も愚意の所存に違はずとのたまへり然れば七万の念佛も報佛恩なり此義黒谷傳二十九に出てたり又和語燈三行に曰今善緣にあひて彌陀慈父を聞ひて正に佛恩を念して報盡を期として恒に念すべし心に相續して餘業を交へざる文とあり又同四に曰天に仰き地に臥しても悦ぶべし今度彌陀の本願に遇へるとを行住坐臥にも報すべし彼の佛の恩徳を文と云へり是れ元祖も佛恩報謝を勸めたまふものにして吾祖は全く元祖に同じきなり時先輩の傳へに佛恩報謝のとは祖師の引きたまふ所の龍樹菩薩の論判で事足るとなれども又他經にも出でたり

大集念佛三昧經七曰若有菩薩麻訶薩應知修學念佛三昧如是修者名報
佛恩文とあり念佛三昧を勤むるが佛恩報謝なり然れは一返一返佛恩
難有やと思ふて唱へねはならぬ様に思ふは不可なり御一代聞書に信
の上は佛恩の稱名退轉あるまじきとなり或は心よりたうとく難有く
存するをば佛恩と思ひ唯念佛の申され候をば夫程に思はざると大な
る誤かり自ら念佛の申され候こそ佛智の御催し佛恩の稱名なれと仰
せごに候文又信の上は尊とく思て申す念佛も又ふと申す念佛も佛
恩に備ふあり文と實に我等は尊とく思ふは少く只思ひがけにふと稱
ふるは多きなりさて末學に乃至十念の釋は信卷に欠けたりと思ふも
のあり是れ誤りなり信卷の眞實信心必具名號の釋が乃至十念の釋と
心得よと云ふ先證よりの傳へなり是きは覺師の本願鈔に此の文を釋
して此文の意は眞實の信心には必ず名號と具すと云は本願の起りを
善知識の口より聞き得るとき彌陀の心光に攝取せられ奉りぬれば攝

取の力にて名號自ら稱へらるゝなり是れ即ち佛恩報謝の勤めなり文
とありて信心決定すれば自ら名號を唱へらるゝなり是れ佛恩報謝と
心得べし已上畧して相承の趣き辨じ終る
この御ことはり聽聞申しはけ候事御開山聖人御出世の御恩次第相承
の善知識の淺からざる御勸化と難有く存じ候文此一段は祖師善知識
の御恩を喜び申す一段あり此の御ことはりとは本願の御ことはりな
り故に敬ふて御の字を用へたまふことはりとは道理と云とにして道
節ちのとなり一帖目第四通自問自答の御文に信心決定する相た即ち
平生業成と不來迎と正定聚との道理にて候文とあり今此の改悔文で
は一心に彌陀をたのみ申すご信心決定の相たなり是れ即ち平生業成
にしてたのむ一念の時往生一定と淨土參りのらちのあいた所なり不
來迎とは攝取不捨の利益なり此利益に預る故に不來迎なり正定聚の
位に住するなり然れは信決定の相たが不來迎平生業成正定聚のこと

聽聞申しは
解候の言と
す

はりきり時道理とは雑集論十一等に明す四道理の中法爾道理なり自
然の道理にして他力の理はりなり○聽聞申しは候と文とは信心の
ことはり名號のゆはれを聞きはけられたとなり此の申すとは心にか
いれども手似葉文字なり爰が聞其名號信心歡喜の位なり御文八十通
にわたりて信心決定とのたまふは皆一念の信心の時往生定まると云
とを明すなり今の所なれば頼む一念の時往生一定御助け治定と心得
るなり又御文に名號のゆはれを聞きはけたるが信心決定とのたまふ
は聞其名號の所なり今の所なれば此の御ことはり聽聞申しはけど云
所なり是れ皆一時に有ることなり然れば八十通の勸化は聞其名號の
ことはりを説きたまへたるものにして今此の改悔文中に攝まるなり
御開山聖人文開山とは續稽古畧壹に成宗建大萬聖祐國寺於五臺詔求
開山第一代住持文とあり然れば唐にも開山と云ことはあるなり是れ
は日本では伏見院の御字に當る蓮師より三百年ばかり已前のことなり

御開山聖人
の言と解す

御出世の御
思

御出世の御思とは式文に爰依祖師聖人之化導聽法藏因位之本誓歡喜
滿胸渴仰銘肝然則報而可報大悲之佛恩謝而可謝師長之遺徳文と云へ
り是れ御出世の御思の深きことをのたまふ御言なり○問曰依祖師聖
人之化導聽法藏因位之本誓と云は云何彌陀の本願を聞かぬ者も無く
知らぬ者も無し本願を聞き得たればこそ淨土へ往生せんと願ふなり
今家のみ非す元祖聖人出現したまへて淨土門を開きたまひてより
此のかた種々に分れたりと雖も皆淨土へ往生せんと願ふは本願を聞
く故なり然るに今始て聞き得る様にのたまふは云何○答曰和讃に眞
の知識にあふとは難きが中になを難しとありて眞の知識と云は元祖
聖人を指すなり無始已來只今始て聞くとのたまふとなり元祖に値遇
ふとは難きが中はなを難しとのたまふ是れに准じて是れを思ふに淨
土眞宗に流れをくみたる者は祖師の御教化を無始已來只今始て聞く
なり云何と云に第十八願の文には至心信樂欲生我國乃至十念とあり

願念法門の
願生我國の
文と稱讃の
稱我名號の
文と見解の
家との三
相異なるこ
とを論ず

て三信十念の誓なり此の願の意を觀念法門には願生我國稱我名字下
至十聲と云へり往生禮讚には稱我名號下至十聲と云へり此の第十八
願の文觀念法門の文往生禮讚との三文を選擇集本願章に擧げてあり
是れ第十八願の謂れを知らせたまふ所の本願章なり是に就て西鎮今
の三家の安心が分れるなり
先鎮西の意は觀念法門に願生我國とあるからは三信即願生我國の一
なり願生我國と云は助けたまへと願ふ心にして是れが回向心なり願
生心なり本願なれば欲生我國なり此の安心故に心存助給口稱南無阿
彌陀佛なり心に助けたまへと思ひ口に南無阿彌陀佛と唱ふ是れで願
行具足し信行具足して往生す助けたまへは願口に南無阿彌陀佛と稱
ふるは行助けたまへの心虚偽ならざるが至心なり至誠心なり疑はぬ
が信樂なり深心なり助けたまへと願ふて南無阿彌陀佛と稱ふるが欲
生我國なり回向發願心なり是れが第十八願なり又往生禮讚に稱我名

號下至十聲と口稱本願を願はせるは淨土の正因は稱名と教へたまふ
趣きなり是れが鎮西の安心なり

又西山は鎮西とは相異す鎮西では三信の体各別とす至心は行捨の心
所を以て体とし信樂は信の心所を以て体とし欲生は欲の心所を以て
体とすと云西山は不然三信とは云へども其体三あるに非す唯一の欲
生心なり其故は觀念法門の願生我國の一句で知るべし去りなから三
信と云ものは行者の方に起すものに非す唯南無阿彌陀佛の名號に取
り付かせん爲の理はり書ぐ三信なり善導の三心釋は八紙に餘をり云
何そ是れを起すことを得んや唯此様な譯けで名號の一つで助かると
云理はり書きが三信なり然るに行者の方に起すと云は本願の意を得
ぬのなり然れば願生心の一つで助けたまふと願ふばかりなり禮讚の
稱我名號は往生の正因を明すと云は不然稱我名號即ち三信なりと知
らせる善導の意なり三信即ち稱我名號故に助けたまへと云ぐ即ち信

心なりと云ふなり

今家の意は不然先御引用の次第で云は、第十八願の文を信巻に引き
たまへ觀念法門往生禮讚の二文を行巻に引きたまへ元祖の本願章の
三文を信行兩卷へ分けて引用したまふ如是く引きたまふ祖師の意は
第十八願に誓ふ所の三信と云は選擇本願を信する信心なり其選擇本
願と云は即ち行巻に引く所の觀念法門往生禮讚の文なりと云意なり
此の本願を深く信して唱ふるが三信十念なり是れが行信行の次第な
り行を離れぬ信なるが故に信心一つで往生なり○問曰事典に預から
ざれば君子の恥る所なり祖師は何れの指南に依りて如是く引き分け
て選擇本願を信する信心とするや○答曰是れ全く祖師の私に非ず聞
其名號信心歡喜の經文の意なり名號を聞くより起る信心なり其の名
號の謂れを頼むものを助け様ふ稱ふる者を救はんとある誓が選擇本
願なり是れが正信偈の本願名號正定業至心信樂願爲因の二句の意な

り文の御引用の次第を心得ると如是し先第十八願を心得るに就て成
就を以て心得ると觀經を以て心得るとの異ひあり故に他流では第十
八願の乃至十念を臨終の十念とす今家の聖人は臨終とも平生とも
たまはず何時なりとも深く信じて唱ふる稱名なり是れが願成就の經
文を以て心得る所なり

次に三家の安心を對辨せば先鎮西は至心の体は行捨の心所を以て体
とし信樂は信の心所を以て体とし欲生は欲の心所を以て体とす故に
三信は往生淨土の正因に非ず往生の正因は稱名なりと云是れ自力な
り即ち彼家にも自力と許すなり

又西山は三信は行者の方に起すものに非ず唯願生心の一つで助け
まへる信なれども其体の無きなり云何と云に淨土の正因に非ず正因
は所歸の佛体なりたのむ所の彌陀が往生の因所稱の名號が往生の因
なり阿彌陀佛即是其行とある故に阿彌陀佛の体が往生の因なり然れ

三家安心の
相異と述す

は助けたまへ南無阿彌陀佛と行者の方に稱ふるは凡夫の機情なり凡夫の念想が正因に成らふ道理は無きなり凡夫の念想なれば機の三業は有漏なり淨土は無漏眞實の淨土なり無漏眞實の淨土へ有漏の三業が因に成らふ道理は無ひと云が西山なり鎮西では凡夫有漏の助けたまへ南無阿彌陀佛なれども正因なり夫れが彌陀の本願に引かれて助かるなりと云是れが西山との争ひなり近くは鎌倉宗要に問答してあり應披見鎮西は凡夫有漏の助けたまへ南無阿彌陀佛が往生の因と云ふ西山に凡夫有漏の念想は往生の因に非ず助けたまふ法体が往生の因と云ふ上來の通り申さねは祖師聖人の御恩徳が知れ難し今家の意三信の体と云は南無阿彌陀佛の名號至徳の尊號を以て体とする無漏眞實の名號が三信の体となるなり故に涅槃の眞因は唯信心の一つなりとのたまふ西山もいやは云はさぬ然らば信心一つで往生なり故に他力の信心と云夫れを四帖目第六通の御文にたのむ体は南無阿彌

陀佛なりとのたまふ即ち夫南無阿彌陀佛と云は念佛行者の安心の体なりとあり其信心がそつくり口に浮む稱名故に他力の稱名と云なり必ず凡夫の爲す所の三業に非ず拜む手も稱ふる口もそつくり信心の顯れなり此義は上來の改悔文の趣きなり如是く西鎮の争ひの所へ吾祖の明かな御教化故に覺師は爰依祖師聖人化導聽法藏因位之本誓文とのたまへて無始已來只今初めて聞くなり實に凡夫の佛になる理けは今こそ明かに知られたり報しても報すべきは大悲の佛恩謝しても謝すべきは師長の遺徳なり御開山聖人御出世の佛恩とのたまふは爰の所あり當善知識様近來法義惑乱に付てにぐくくしき世の中じやと思召し御門下の人々が若し他流の安心を以て祖師化導の趣きを忘るゝかど愁嘆したまふ故に近年は遊山にも御出も無く御殿に居たまふは只此の安心の趣きを門末一統へ相承致させたまひの思召なり實に恐る可きとなり又式文に念佛修行之要義雖區他力眞宗興行即起從今師

知識專修正行繁盛亦成自遣弟念力酌流尋本源偏是祖師德也須稱佛號
 報師恩文とあり他流に談する所は他力の中の自力なり其故は往生は
 凡夫の用きに非す若不生者の誓にして他力なり臨終に來迎の力に依
 りて往生する故他力なり鎮西なれば助けたまへ南無阿彌陀佛が往生
 の正因なり然れども自力じやと申すのは唯助けたまへでもらちあか
 ず唯稱ふるばかりでも往生かなはぬ助けたまへ南無阿彌陀佛で往生
 すと云が故なり今家は他力の中の他力なり三信の因も他力往生の果
 も他力なり三信の体南無阿彌陀佛の名號なる故に其儘口に浮む南無
 阿彌陀佛なれば他力の中の他力あり是れ專修正行の繁盛は今師の知
 識に依るが故なり流を酌んで本源を尋ぬれば偏へに是れ御開山聖人
 の御恩徳なり實に如是きの御教化なるが故にいよく盛なり
 この上は定め置かるゝ御掟一期を限り守り申すべき候文此の一段は
 掟を示す一段なり掟と云は法度定めのみなり掟の字廣韻に徒徑切音

○掟段
 此の二段は
 附録二十一
 頁已下に詳
 説あり

四帖目六通

御一代記三

丁三

定とあり然れは定め書きのとなり源氏に親の掟に異へりと云ひ筆の
 掟すまぬこゝちしてなと出でたり惣てをきて定めのとを掟と云ふ
 御文に報恩講中に於て衆中として定めをく所の義一として異變ある
 べからず文とあり時此の御の字を入れるは本山よりの掟に非す彌陀
 如來の掟と云意なり御一代聞書に曰聖人の御一流は阿彌陀如來の御
 掟なりされい御文にい阿彌陀如來の仰せられける様はとあそはされ
 候文とあり御文八十通皆悉く彌陀の御掟御定め書きなり故に御掟と
 のたまふ其の定め書きは神明三ヶ條に一諸法諸宗ともに是れを誹謗
 すべからず一諸神諸佛菩薩をかるゝむべからず一信心を取らしめて
 報土往生を願ふべきと等とあり此の信心を取らしめて報土往生を遂
 ぐべきとある一ヶ條い彌陀の御掟と云ことは聞てへたり然れども
 餘の二ヶ條は云何と云に第十八願に唯除五逆誹謗正法とあり是れが
 定め書きなり此の三ヶ條を開いたが神明六ヶ條なり其他所々に御掟

あり報恩講三ヶ條六ヶ條八ヶ條は取り分け報恩講に就ての御掟なり
 當流は霜月二十九日より翌年霜月二十九日までが報恩講のあどぐり
 なり故に霜月二十九日は御さらひの初めなり經のあどぐり手習のあ
 どぐりをさらへると云が如く報恩講あどぐりの御文なるが故に御さ
 らへの御文と云ふ報恩講が年分と云となり此の唯除五逆誹謗正法を
 開ひたが五惡段なり殺生等の五惡をほしひまゝに造れば此世てば禁
 率にあづかり未來は三塗に墮すると教へたまふなり此趣きを御文に
 は外には仁義を以て本とし内心には他力の信心を蓄はへどのたまふ
 は全く私しに非ず釋迦彌陀の御掟なり祖師は往生に障りなければと
 てひがことを等どのたまへり善惡は祖師の眞子なれども此所に間異
 ひ有りし故に永く勘當したまへり是れは内感冷然なり祖師の御子に
 斯様のことあるべき理無し此掟を取りはずさは永き世聖人の門徒に
 非ずどのたまふ然れば此の趣むきを口に申しながら御掟にそむきて

はまぬことなり第十八願を傳へる眞宗には如是くあるべきことなり
 能くよく慎むべ上來乍恐御文を以て斯様でも有らふと伺ふのみ

即得往生義

講師圓乘院 巴陵宣明講述

副講 占部觀順校閱

巴陵宣教授粹校正

もろくの雜行雜修自力のこゝろをふりすて、乃至御恩報謝と喜ひ申候

此一節は安心領解を申す述るなり當流の安心と云へ南無阿彌陀佛の意なり御文五帖第十一通に南無と云二字の意はもろくの雜行をすて、疑ひ無く一心一向に阿彌陀佛を頼み奉る意なりさて阿彌陀と云四の字の意は一心に彌陀を皈命する衆生をやうも無く助けたまへる謂れか即ち阿彌陀佛の四の字の意なりされは南無阿彌陀佛の躰を如是心得わけたるを信心をとるとは云なり文如是示したまふは往々に

是れあり此意は御文の全体なり是によりて是を思ふにもろくの雜
行雜修自力の心を振りすて一心に阿彌陀如來後生御助け候へと頼
むは是れ南無の二字の意なり頼む一念の時往生一定御助治定とは阿
彌陀佛の四字の意なり如是心得わけたる令解を他力の信心の取ると
は云なり此上の稱名は佛恩報謝と喜び申なり是れを御文五帖目二十
二通に曰されは南無阿彌陀佛と申す体は我等が他力の信心を得たる
相たあり此信心と云は此南無阿彌陀佛の謂れを顯はせる相たなりと
心得べきなり文(二帖目十四通同之)又四帖四通に曰夫南無阿彌陀佛
と云は即ち是れ念佛行者の安心の体なりと思ふべし文このたまへり
是等の御言にて此改悔文の主旨を解了すべしさて言南無者の御釋に
依りて按すればもろくの雜行雜修自力の心をふりすて一心に阿
彌陀如來我等か今度の一大事の後生御助け候へとたのむは南無皈命
の意なり頼む一念の時往生一定御助け治定と存しとは言阿彌陀佛者

卽是其行の所皈の攝取不捨故名阿彌陀佛是曰他力の理はりを領解申
したる所なり發願回向の一は能皈の機と所皈の法とに通す其所以は
銘文に亦是發願回向之義と云は二尊のゆしに隨ふて安樂淨土に生れ
んと願ふこゝろありとのたまへるなり文このたまへり執持抄の釋よ
り思ふに發願はかりを示したまへり回向と云は如來の回向ををいた
てし教へたまふ今家なり故に能皈の機に付ては釋したまはす但し狹
善趣求の回向には非す心を回して西方に向ふ義もあり然れば發願卽
回向の意なり執持抄にそもく南無は皈命皈命の意は往生のたのな
れは又是れ發願なり此意あまねく万行万善をして淨土の業因となせ
は又回向の義あり文このたまへり此中回向は是れ他力回向にして行
者所修の万善万行には非すと可知 さて發願回向をは如來回施の意
ろなれば所皈の阿彌陀佛につけたまふなり行卷曰言發願回向者如來
已發願回施衆生行之心也文是れ大悲回向心なりと釋したまふ其回施

一たまふ衆生の行と云は所謂阿彌陀佛即是其行なり行卷言即是其行者即選擇本願是也文このたまひ又銘文には即是其行は是れ即ち法藏菩薩の選擇の本願なり安養淨土の正定の業因なりこのたまへる意なり文と具に釋したまふは是れは是れ本願名號正定業なるが故に衆生の往生淨土の行なり此の行を衆生に回施したまふ大悲心に付て云は、發願回向と云回施したまふ所の衆生往生の行に付て云は、阿彌陀佛即是其行なり故に執持抄に曰此の能皈の心所皈の佛智に相應するるとき彼の佛の因位の万行果地の万徳悉く名號の中に攝在して十方衆生の往生の行休となれば阿彌陀佛即是其行と釋したまへり文此釋なれ阿彌陀如來の凡夫の爲めに御身勞ありて此の南無阿彌陀佛の回向をば我等に與へんが爲めに回向成就したまひて一念南無と皈命する所にて此南無阿彌陀佛の回向を與へんとの御約束なりと示したまふ釋なり是れに依りて一念皈命の信心の起る時に無上大利の功德

を與ひたまふを發願回向とは申すなり是等の吾祖覺如上人の御釋に依りて示したまふ今師上人の御文なりされはつらく御文を按するに南無と云は願なりとのたまふは執持抄に南無は皈命皈命の意るは往生のためなれば又是れ發願なりとのたまふと同一又御文二帖目十五通に南無と云二字は即ち極樂へ往生せんとねがひて彌陀を深く頼み奉る意るなり文このたまふは南無と云は願の意なり銘文に安樂淨土に生れんと願ふ意るなりとのたまふと全く同一又曰皈命と云は衆生の阿彌陀佛後生助けたまへと頼み奉る意るなり文是れ其能機に付ての發願回向の義ありこゝろを一にして阿彌陀佛を深く頼み奉るは何の爲そなきは往生淨土のためなり故に後生助けたまへの意なり欲生我國の誓ひ願生彼國の勸めなり故に論主の一心皈命も願生安樂國の意なり又御文に發願回向と云はたのむ所の衆生を攝取して救ひたまふこゝろなり是れ即ちやがて阿彌陀佛の四字のこゝろなり

五帖五通

文どのたまふ御勸化は惣て如來回施の發願回向なるが故に所皈の阿彌陀佛の四字につけてのたまふ是れによりて是れを按ずるにもるもろの雜行雜修自力のこゝろをふり捨て、一心に阿彌陀如來を頼み奉るは我等が今度の一大事の後生御助け候への意なるは是れ即ち皈命の意は往生のためなれば又是れ發願なりの意なり頼む一念の時往生一定御助け治定と云は發願回向の意あり即ち阿彌陀佛の四字の意なり故に南無と皈命する一念の所に發願回向のこゝろあるべし是れ即ち彌陀如來の凡夫に回向しますすこゝろなり文どのたまへり此の發願回向の大善大功德を興へまします故に無始已來作りと造る惡業煩惱を一時に消滅したまふ故に即得往生住不退轉の大益を得故に往生一定御助け治定とのたまへり御一代聞書曰發願回向と云はたのむ機にやがて大善大功德を興へたまふなり其体南無阿彌陀佛なり文ど然れば能回施の大悲心に付て云は、發願回向なり所回の行体に付て

御一代記二

五帖目二

云は、阿彌陀佛即是其行なり能回所回は異なれども体は一なり如是先文の主旨を心得べし

一心に阿彌陀如來我等が今度の一大事の後生止和讃に天親論主は一心に無尋光に皈命すとのたまひ御文にもろく、の雜行をすて、一念に彌陀如來今度の後生助けたまへと深くたのみ申さん人は文どのたまひ是れ一心に彌陀に皈命するの信心なり○阿彌陀如來は所皈の佛あり念佛衆生攝取不捨の阿彌陀佛なり言南無者の御釋では言阿彌陀佛者即是其行あり即ち選擇本願是をなり頼む一念の時往生一定御助け治定せしめたまふ阿彌陀如來なり(中略)

阿彌陀如來とは所皈の佛体本願の法王なり和讃に十方微塵世界の念佛の衆生をみそなはし攝取して捨てされは阿彌陀と名けたてまつるとのたまふ

我等が今度の一大事の後生止

此土入証得果の法は一大事の修行と云べし他土入聖証果の淨土門には一大事の後生と云なり本願には若不生者不取正覺と云あり願成就の文には即得往生と説けり生の一字は今家の肝要なり論には願生安樂國と説き註には因縁假名の生生即無生無生而生と釋したまへり無生而生の故に因縁假名の一大事の後生なり大經曰雖一世勤苦須臾之間後生無量壽佛國快樂無極支と後生安樂の一大事なり教行信証大意曰此土の得道と他土の得生と異なりと雖も得る所の証りは唯一つなりと知るべしとさは往生と云へるも實には無生なり此の無生のことばりをは安養に至りて証るべし其位を指して眞實の証と云なり文と一切諸法は從來眞空なり無自性なるが故に因縁に依りて生す其因縁生に善惡淨穢宛然として別る故染淨因縁緣起無窮なり今淨土に往生

する因縁は論註には信佛因縁と云ひ宗師は光明名號攝化十方と釋したまへり吾祖は是れに依りて光明名號顯因縁と判して然も獲信の因縁と得生の因縁との兩重の因縁を明して念佛成佛是眞宗の義を示したまふ今師上人の御教化は全く是れなり

御助け候へと頼み申して候止

是れ飯命のこゝろなり故に御文に飯命と云は衆生の阿彌陀佛後生助けたまへと頼み奉るこゝろなり文と云ひ又は南無と云二字は即ち極樂へ往生せんと願ひて彌陀を深く頼みたてまつるこゝろなり文と云ひ一念に彌陀如來今度の後生助けたまへと深くたのみ申さん文ともなたまへり是れに依りて之を思ふに後生御助け候へと云は極樂へ往生せんと願ふこゝろなり銘文に亦是發願回向之義と云は二尊のめしにいたがふて安樂淨土に生れんと願ふ心なり文とたまたまへるなり執

持抄に皈命のこゝろは往生のためなれば又は是れ發願なり文是等の御
言にて案視すれば是れ發願回向のこゝろなり他流の釋又然り和讃に
盡十方の無尋光佛一心に皈命するをこそ天親論主のみことには願作
佛心とのたまへり文然れば佛にならんと願ふこゝろなり然れば一心
に阿彌陀如來に皈命したのみよる心は後生助けたまへの發願なり即
願作佛の心なり例せば願生安樂國は是れ作願門なり天親菩薩皈命の
意なりと釋したまふ如く論主の一心皈命したまふは更に別事に非ず
安樂國に生れんと願ふはかり今も其の如く一心に阿彌陀佛を深くた
のみ奉るこゝろは後生助けたまへの意なり其故は阿彌陀如來の仰せ
られける様は末代の凡夫罪業の我等たらんもの罪は云何ほど深くこ
も我を一心にたのまん衆生をは必ず救ふべしと仰せられたり文此仰
せにしたがふて一心に頼むはかり法花義疏四辯曰南無者皈命也救我
也とあり我を救ひたまへの意なり娑婆等にも皈依と云は救濟義とあ

り然れば三寶に頼みよるは我を救へたまへのこゝろなり三寶威力を
以て助け救ふの道理なるが故に況んや阿彌陀佛は頼む衆生は何の
やふも無く必ず助けまします大願力なるが故に此佛に頼みよる心は
今度の後生助けたまへのこゝろはかりなり然るに末學此の言を解し
誤りて衆生の方より後生助けたまへの願ひを起し立てる様に思ひ
より異解まぢくなり然れば南無の言に救濟の義救護の義有ると知
るべし

此の上の稱名は御恩報謝と喜ひ申し候(上畧)

問曰此の信の上の稱名は本願の乃至十念の迂擇本願の念佛なりや○
答曰然り深く信して稱ふるところの稱名念佛なり○問曰乃至十念の
誓は報謝の稱名なりや○答曰不然佛何ぞ報謝の誓ひあらん法事證に
も雖復爲生苦行不覺小恩文とのたまひ然るは報謝せんもの若し生せ
すはと誓ひたまふとなし故に報謝の願文と云べからず○問曰若し然

らは報謝の誓ひに非すと云は、自身往生の業なりや然るに此上の稱名は御恩報謝と喜ひ申候と示したまふは云何○答曰此義は御文に自問自答なされて詳に示したまへり曰一念の信心獲得已後の念佛をば自身往生の業とは思ふべからず唯ひとへに佛恩報謝の爲めと心得べきものなり文とのたまへり改邪抄に正定業たる稱名念佛を以て往生淨土の正因と計らひつゝのるすら猶以て凡夫自力の企てなれば報土往生叶ふべからずとのたまへり正定業たる稱名念佛と云は念々不捨者は名正定之業順彼佛願故の深く信して稱ふる所の正定業たる稱名念佛なり是れ即ち念佛往生の誓ひなり是れ誓願不思議なり佛智不思議なり名號不思議なり然るに此の稱名念佛をば自身往生の正因と計らば是れ自力なり佛の御計らひなるを已か善根と思ひ我が作る功德と思ひ計る故自身往生の業と思ひ計るは猶自力の企てなれば報土往生かなふべからずとのたまへり自身往生の業とならぬと仰せせられず

成るも成らぬも凡夫の計り知る所に非ず佛智の不思議なり故に一念信心獲得すれば即得往生の大益を得るとを悦ぶばかりなり然れば信するも稱ふるも私に非す如來の御計らひと思ふはかりなり○問曰乃至十念を信の十念と申すもあり當流も然りや○答曰他流には左様に沙汰することも有りと思ゆ今家に嘗て此の沙汰無し一多証文曰本願の文に乃至十念と誓ひたまへり已に十念と誓ひたまへるにて知るべし一念に限らずと云とを況んや乃至と誓ひたまへり稱名の偏數定まらずと云とを此の誓願は即ち易性易行の道を顯はし大慈大悲のきはまり無きことを示したまふなり文然れば稱名十念なると炳焉なり加之銘文並に唯信文意にも具に御釋あり○問曰執持抄曰本願を信し名號を稱ふればその時分に當りて必ず往生は定まるなりと知るべし文と又夏の御文に云ひしと我等が往生成就せし相たを南無阿彌陀佛とは云ひけると信心をこりぬれば佛体即ち我等が往生の行なるが故に一

聲の所に往生を決定するなり文どのたまひ是等の御言によりて一念南無阿彌陀佛と頼み申す所に信行具足して往生す此の上からの稱名は御恩報謝と喜ひ申し候とは云何○答曰此の義は上に辨する一念九念と分かつ異計なり此の願はとくと當流の正意を得ざるより起るなり其故は一念も上盡一形の多念も佛の誓ひなるが故に他力本願の催促の不行なるものを如是正定業と報謝の行と二に分け心得たるが甚だ誤まれり是れに依りて執持抄は名號を正定業と名ける義を述ふる一段の文なり故に彼の抄に曰名號を正定業と名くるとは佛の不思議力をたもては往生の業正く定まる故なり若し彌陀の名願力を稱念すとも往生猶を不定からは正定業とは名くべからず文と標して具に釋して其釋を結する文なり標結相映して其義を了知すべし平生に本願を信し名號を稱する時往生猶不定ならば本願名號正定業とは名くべからず故に知ぬ本願を信し名號を稱ふる其の時分に當りて必ず往生

は定まれる故にたとひつたなき業因に引かれて臨終に其の名號を稱へずとも平生業成なるが故に往生すべきと勿論なり是れは是れ正定業を釋する一段の文なり此抄は念々不捨者は名正定之業の道理こそ示したまふ文なれ異解者の一念九念と分つ違文にはなれども却て証文には非す思之さて夏の御文も然り其所以は本願を信し名號を稱ふると雖も此名號をは正定業たることはりを辨まへずして餘所なる功德と思ひて其の稱名の功にて往生をもとげらるゝ様に存して臨終の正念を期する所の自力の行人に對して此の南無阿彌陀佛と申す体は我等が往生の業なるが故に一聲の所に往生を決定すなせと云に此の行体は万善万行の惣体なるが故に一聲の所に万徳が具はり万つの善根が満ちみつる故に往生を決定するなり此の一聲が往生決定の稱名念佛なるが故に念々の稱名皆往生決定の佛恩の念佛なり然れば多念の功にて往生を決定すると云とは非す若し多念の功にて往生を決

定するならばひしと我等が往生を成就せし相の南無阿彌陀佛とは申
 し難し是れ又多念に對して一聲とこそそのたまひ必ず一聲に限ると云
 とには非ず異解者は一聲の言になすんで一念業成を慕るは非なり易
 行の至極を顯はして一聲と示したまふ深思せよ○問曰黒谷聖人も南
 無阿彌陀佛と云は別したるには思ふべからず阿彌陀ほとけ我を助
 けたまへと云言と心得てどのたまひ吾祖も南無阿彌陀佛とたのませ
 たまひてこのたまひ今師も南無阿彌陀佛とたのめ皆人と詠じたまひ
 又一念南無阿彌陀佛と皈命するともものたまふ此等の御言より按すれ
 は南無阿彌陀佛と頼むと云と明かなり然れば一心に南無阿彌陀佛と
 頼む時往生一定と心得るも其理なきに非ずや○答曰所謂法は分別に
 皈すると云て其義旨を心得べし此等の御言の意は口も心も一なりと
 示したまふと解了すべし元祖の意は行具三信を教へたまふ故に口に
 南無阿彌陀佛と稱ふると自然に心に佛助けたまへの信の起るなり吾

祖も亦然り此詞は口稱本願を述べたまふ故に南無阿彌陀佛とたのま
 せたまへて向へんとはからはせたまふとありせの言は他力を顯す重
 き字なり念佛成佛自然の意を顯すの法語なり念佛の申さるゝも行者
 のはからひに非ず往生するも亦自然なりと示したまふ今師の彌陀の
 名を聞き得るとの有るならば南無阿彌陀佛とたのめ皆人と詠したま
 ふは法を聞く道に心の定まれば南無阿彌陀佛と稱へこそすれと詠し
 たまふと全く是れ同なり遺徳記にのせたまふ御歌と照見すべし又一
 念南無阿彌陀佛と皈命すると云言は淨土眞要抄に出でたり此故に御
 一代聞書曰信心と云は彌陀を一念御助け候へと頼む時やがて御助け
 ある相たを南無阿彌陀佛と申すなり惣して罪は云何ほどあるとも一
 念の信力にて消し失ひたまふなり去れば無始已來輪轉六道の妄業一
 念南無阿彌陀佛と皈命する佛智無生の名願力にはるぼされて涅槃畢
 竟の眞因始めてきざす所をさすなりと云御言を引きたまひて文との

たまへり心と口と一つなると明かなり此の御言に罪は云何ほどあるとも一念の信力にて消し失なひたまふとあるは知るべし頼む一念の時往生一定なり其の御助けある相を南無阿彌陀佛と申すなり是れ口と心と一なることを示す頼む心の起る時御助けに非ず南無阿彌陀佛と稱ふる時御助けあるとならば異解者の信行具足の安心の証文にも成らふかなれども今は不然思之又御文には然れば一切の佛菩薩もより彌陀如來の分身なれば皆悉く一念南無阿彌陀佛と皈命したてまつる中にみなこもれるが故に能るかになむべからざるものなり文とのたまへば一念皈命の時往生の得否を示したまふ所に非ず聖教は句面の如く心得べし吾祖の信行不離の法門より按すれば行を離れざる信なるが故に南無阿彌陀佛とたのめと示したまふ可知一念皈命の信心起る時大利益の功德を得る故に即得往生の大益を得るとなり又彌勤付屬の文なれば一聲の所に無上大利益を具足すとあり然れば吾

祖の高判を根本として聖教を觀見すべれば破竹の如く解を開くなり自己の了簡を以て法義を惑乱すると勿れ○問曰御文に二心なく如來をたのむ心のねてもさめても憶念の心常にして忘れざるを本願たのみ決定心を得たる信心の行人とは云なりとのたまへり此御言より伺へはいつまでも如來をたのめとのたまふに非ずや然れば一念たのみ時往生一定とのたまふは違するに非ずや○答曰頼むと云は信するとなり故に佛智不思議をたのむべいと云は本願他力をたのみつゝのたまひ御文に助けまゝと思ふ一念の信まことなればどのたよふ可知たのみと云は信心なることを喩へは最初一度ひ燈を點すれば油のある中は炎々相續して消へざるが如く一念發起のたのみ心の相續して寐ても寤めても憶念の信常にして忘れざるなり故に御一代記聞書曰一念の信心を得ての後の相續と云はさらに別のことに非ず初め發起する所の安心に相續せられて尊くある一念の心のとをるを憶念の

心常にも佛恩報謝とも云なりいよく皈命の一念發起すること肝
要なりと仰せ候なり文然れば今一念發起の信心常に不斷相續して三
毒煩惱はしばらく起れども誠の信心は彼等にもさへられず憶念の心
斷へずして本願を思ひ出る心の相續す此の一念信する心臨終までと
をりて往生するなり宜なるかな他方回向の信なることを人動もすれ
は此の御言を心得感ふて常たのみと云一途を執して他の浄土門の助
けたまへ南無阿彌陀佛と臨終まで願ふと同じふす是れ眞宗の正意に
背けり帖外の御文に曰此の上には名號を稱るとも佛助けたまへと思
ふべからず彌陀をたのむ心の一念の信心によりて易く御助けあると
のかたじけなさのあまり彌陀如來の大悲御助けありたる御恩を報し
奉る念佛なりと心得べきなり此の御言なれば心と口と一なるにより
て聲に顯はして南無阿彌陀佛と申すは後生助けたまへと思ふべから
す一度び助けたまへの一念起る時に往生一定なれば此の一念の信力

に依りて御助けの御恩を報したてまつる念佛なり後生助けたまへの
念佛に非ず末學誤ると勿れ

此上は定めをかせらるゝ御掟一期を限り守り申すべく候文

凡そ宗々のならひには制規々々として其作法あり是れ皆佛法を弘通せ
ん爲めなり今も亦然り祖師善知識の御恩淺からざる廣大なることを知
らば其の掟を守るべし掟と云は法度定めのことなり掟は廣韻に徒徑切
音定天掟見道書文源氏にねやのをきてにたがへり文と云ひ筆のをき
ですまぬこゝちして等の語ありをきてさだめのこと見ゆ御文にも報
恩講中に於て衆中として定めをく所の義とのたまへり當流の掟は改
邪抄及破邪顯正鈔に具に顯はれたり今御文に依りて心得べし其時の
弊を制止したまふも掟なり然れども御文の中に三ヶ條六ヶ條八ヶ條
の制詞あり是れを能く守らは其枝葉は自然に守らるゝなり且く三帖
の六通を以て心得べし世に掟の御文と稱す専ら掟のみを示したまふ

故なるものか御一代聞書に曰聖人の御一流は阿彌陀如來の御掟あり
されは御文には阿彌陀如來のをいせられける様はとあそはされ候文
と示したまへり故に御掟と尊重の言わり御文に其の信心のどをりを
心底にをさめをきて他宗他人に對して沙汰すべからず又路次大道我
々の在所なんどにてもあらはに人をもはいからず是を讃嘆すべから
ず文このたまへり上の第二通目の奥書にいまこの文にしるす所の趣
は當流の親鸞聖人の勤めたまへる信心の正義なり此の分よく心
得たらん人々はあひかまへて他宗他人に對して沙汰すべからずとの
たまへり五帖目御文に此の義は當流一途の所談なるものなり他流の
人に對して是の如く沙汰あるべからざる所なり文と示したまへり此
義と云は即得往生住不退轉のことはり經論師釋明著なれども此の義
を聞きては他宗他人耳を驚かし心を駭かし信せされば終に誹謗一惡
道に墮する因種を植へんとを恐る此の故に制したまふ次に又路次大

道あらはに人をもはいからず是を讃嘆すべからずと云は大道大路に
ても又關屋渡りの船中にても更に其はいかり無く佛法かたの次第を
人に顯露にかたると然るべからざるともものたまへて無上の大法を
輕忽すると勿体なきの極故に所々にしはく誠めたまふ われく
の在所あんどにてもあらはに人をもはいからず是を讃嘆すべからず
とはたどひ一宗の門徒中にても宿善無宿善の機と分別し信不信の機
をかながみて人を勤化すべし其故は三帖目御文に無宿善の機の前に
於ては正雜二行の沙汰をする時はかへりて誹謗のものとひとなるべき
なり此の宿善無宿善の道理を分別せずして手びるに世間の人をもは
いからず勤化をいたすと以の外の當流のをきてにあひそもけりこの
たまひ是れも往々に述べたまへり是れ等の趣を能く分別すべし 御
文に曰次には守護地頭方にむきても我は信心を得たりと云ひて疎畧
の義無くいよく公事をまたくすべしと云は一國をも領するを守護

と云々一郡一郷を治むると地頭と云往古は海内皆朝廷より國司を下して諸國を治めたまふ右大將頼朝の時に至りて武將に委任したまふ
 疎畧とは類書纂要十二日忽畧は志文公事とは居家必要十五日公事無
 私曰公有所作意曰事文と是れ定まれる年貢所當より始めて守護地頭
 より下民にかゝる課役を公事と云ふ今の俗に公訴を公事と稱するを
 云には非す またくとは全の字なり已か自由をかまはず公用をかゝ
 さるを全ふすと云なり三帖目御文に四には守護地頭に於ては限りあ
 る年貢所當をねんごろに沙汰し其外仁義を以て本とすべしとのたま
 へり是も往々に示したまふ悪人正機の本願なるが故にかく制したま
 ふ知る可し佛祖の恩を知るならは屹度守るべきものなり 御文又曰
 又諸神諸佛菩薩をもたろそかにすべからず是れ皆南無阿彌陀佛の六
 字の中にこもれるが故なり文とのたまふは神明三ヶ條六ヶ條に具に
 示したまふ二帖目十通に曰夫一切の神も佛と申すも今此の得る所の

三帖目第十
 通

本懷集末十二
 丁三

全六十
 六丁

他力の信心一をとらしめんが爲の方便にもろくの神諸の佛と顯れ
 たまふ謂れなればなり然れば一切の佛菩薩も本より彌陀如來の分身
 されは皆悉く一念南無阿彌陀佛と皈命したてまつる中にこもれるが
 故にねろかに思ふべからざるものあり文とのたまへり諸神本懷集に
 第一に權社の靈神を明して本地の利生を尊むべきことを教へ第二に實
 社の邪神を明して承事の思ひを止むべき旨を勸め第三に諸神の本懷
 を明して佛法を行し念佛を修すべき趣を知らしむ又六要抄六末初に
 詳かに明すが如し本懷集に曰彌陀を念し奉きは自から十方三世の諸
 佛菩薩乃至一切の神祇冥道日月星辰を念することほりあり又日本地
 の佛菩薩は悉く彌陀一佛の智慧なれり名陀の名號を稱するに十方三
 世の諸佛自ら念せられたまふ諸佛菩薩念せらるゝ謂れあれば垂跡た
 る諸神皆又信せらるゝこと其理必然なり文故に二帖目第二通奥書に
 曰又自餘の一切の佛菩薩ならびに諸神等をも我か信せぬばかりあり

二帖目六通

あながちには是を輕しむ可からず是れ實に彌陀一佛の功德の中に皆一切の諸神はこもれりと思ふべきものなり惣して一切の諸法に於てそしりを爲す可らず是を以て當流の旋を能く守れる人と名くべし文とのたまへり此の諸往々に是れあり此の意を以て了知すべし御文にこと外には王法を以て表てどし内心には他力の信心を深くたくはへて世間の仁義を以て本とすべしとのたまふは外相と内心とを分けて佛法を顯はさす内心に深く蓄ふべきことを示す破邪顯正抄曰佛法王法は一雙の法なり鳥の二つの翼の如し車の二つの輪の如し一つも欠けては不可あり故に佛法を以て王法を守り王法を以て佛法をあがむ是に依て上代と云ひ當時と云ひ國土を治めまします明主皆佛法紹隆の御願を専らにせらる聖道と云ひ淨土と云ひ佛教を學する諸僧かたじけなく天下安穩の祈請を至したてまつる一向專念の輩ら何そ此の理はりを忘れんや文賦に佛法に遇ふは國王の恩化の致す處なり故

破邪顯正鈔
甲十五

顯正抄中五
丁

に四十花嚴十二曰若無王力功行不成法滅無餘况能利濟文諸經の付屬多く勸持せしむるに依りて四恩の中にも國王の恩を報す可きことを説く聖道と云ひ淨土と云ひ何そ國恩を忽緒せんや就中我が宗の如きは爲凡を先きとして剃髮染衣の身ながら妻孥を畜ひて在家と同じ市中に道場を構ひて在家の尼入道を教化す國豊に民富んで兵才を用ゆること無き世に遇ふてあくまで法を教へ意のまゝに法を聽聞するは實に國王の恩化なり豈出家剃染の身なりと謂ひて國家の恩を等閑にすべけんや依て破邪顯正鈔曰生々に生れし六道の生よりは此の度の人身は喜はしく世々にかうふり國王の恩よりは此の處の皇恩は特に重し世間につけ出世につけ恩をあふき徳をあふくいかでか王法を忽緒したてまつる可きやいかに況んや專修念佛の行者在々所にして一滯をのみ一食を受くるに至るまで總しては公家關東の恩化なりと信し別しては領主地頭の恩致なりと知る公私につけて更に違背の

儀なした、自身得道の爲めに是れを修するはかりなり文どのたまへり是れに依るに一宗の徒は特に王法を以て表とすべきこと道理必然あり改邪抄夫出世の法に於ては五戒と稱し世法に有りては五常と名くる仁義禮智信を守りて内心には他力の不思議を持つべきよし師資相承したてまつる所なり文然れば仁義禮智信の王法は人道の常なり是れ即ち大經に説く五惡五善なり淨土を願ふ人何そ是れに背かんや是は是れ唯除五逆誹謗正法の抑止なれば本宗の御掟は佛勅なり二帖目十三通に曰夫當流に定むる掟を能く守ると云は他宗にも世間にも對しては我が一宗のすがたを顯はに人の目に見へぬ様にふるまへるを以て本意とするなり然るに近ごろは當流念佛者の中に於てはざと人目に見へて一流の相たを顯はして是を以て我宗の名望の様に思ひて特に他宗をこなしをこゝめんと思へり是を言語道斷の次第なり更に聖人の定めまゝましたる御意に深くあひそむけり其故は已に牛を

盗みたる人とは云はるとも當流の相たを見ゆべからずどこを仰せられたり此の御言を以て能く心得べし文是れにて了知すべし他の聖道門の修行者と雖も狂を顯はし愚を現して菩提心を奪はれんとをたしなむは誠の佛法者の常なりまして我祖の内に宏智の徳を具ふと雖も名を碩才道人の間に銜はんことを恐れ外にはたゞ至愚の相を現して身を田夫野叟の類に俾しふせんと欲して自ら愚禿と稱したまふ聖人の御門弟として若は後世者若は善人若は佛法者と見ゆる様にふるまはんや此の故に御一代聞書に蓮如上人無紋の物をさることを御さらひ候殊勝さうに見ゆるとの仰に候又黒き衣を着候を御さらひ候墨のくろき衣を着て御前へ參れば仰せられ候衣紋たゞしき殊勝の御僧の御出候と仰られ候文とあるも此の意なり改邪抄に具に示したまへり後生者と云は道心の風情ありて後世菩提に志し世々世々とも思はぬ類なり善人と云はひとすぢに作善功德に志し財を散し寶を施す願

なり佛法者と云は佛法の本意を知り學智ある風情の類なり是等の相
 を見ゆる様にふるまへるをきらひたまふなり内心に他力の信心を深
 く蓄ふれば自然と見ゆるは厭ひたまはず見ゆる様にふるまふをは御
 きらひたまふなり牛盜人と云は古來二説あり應知惣て人を惡罵する
 の極まり盜人と云より甚たしきは無し特に資財雜具を盜むよりも蓄
 養する大物の牛などを盜むは盜賊人の極なり故にたとひ故事に依ら
 ずとも牛盜人と云はるるとも云も妨げ無なるべし世間の仁義と云
 は只人まねばかり仁義までの風情ならばどのたまひし仁義なるべき
 かなぜと云に五常の仁義は人道の本理たる故に王法と云が即ち五常
 なり今は先世間の通例を守り放逸無漸ならぬ人並世間の禮法の通り
 を守るを惣て仁義と云ひ習はせり若は後世者若は善人若は佛法者の
 相を見せぬが世間の仁義を本とするところなるものか然れば聖人善
 知識の御恩を知るそなれば此の掟を守り申すべく候此の外御文の御

示を深く守るべし畧して辨し終る

圓乘院宣明講師小傳

巴陵宣教編稿

北陸の一隅より起り身軀偉大に骨格逞く容貌温和にして夙に大谷派講師中の龍象として芳名益熾々たる圓乘院宣明師は博く内外の諸典に通し深く眞宗教理の幽玄を究められたり師が一世の講義は時として簡約を旨とするあり又周到を旨とせるあり或は甲所を詳にするあり或は乙所を明かにするあり其所講の典籍の如き宗餘の乘に亘りて數十部の多きに達す余は其末裔を嗣ぎ師の恩澤に沐し口碑と記録とに依りて僅かに其小傳を綴るの榮を得たり

師諱は宣明巴陵と號し圓乘院と稱す寶延三年庚午三月五日加州八田村法圓寺に生る父は惠山母は石井氏なり父は師の幼にして伶俐なるを知り六七歳の頃より加州了現翁の下に通學せしめ俗典を研せしむ

二
翁の寓は師の家を去る里許師翁の寓より歸ることに父は式臺にて習授せし所を讀ましめ遺忘するものあらは再ひ翁の寓に戻らしめ是れを復習せしむ父の如是き嚴厲なる教育は師をして強記の人たらしたるものゝ如し

明和四年十八歳にして甫て京師に入り高倉大學寮に於て龜陵香醉の二師に隨ひ瑩雪の勤孜々として怠らず仰ひて列祖の聖教を觀し伏して先哲の正解を察し群籍を貫練し要妙を究暢す後南都初瀬の名刹に遊んで但舍唯識維麻勝鬘等大小顯密の玄理を究め就中但舍に於て特よ力を竭し終に但舍宣明の名を博せり

某年高倉大學寮に於て論伽師地論を講す忽にして名稱四方に達し學徒の慕ひ來る者甚た多し○安永七年夏大學寮に入阿毘達磨論を講す○同八年雙論伽論を校し○同九年教行信証自釋を刊行す

天明二年十二月三十三歳にして住を越中國高岡市下川原町開正寺に

移し寺主の長女季子と結婚す師の開正寺に來りしものは時の寺主自然師の博識にして廣く内外の書籍を貯藏せられ且雲處堂と云ひる學寮の設け有りしを以て修學上益する所有りしが故なりと云ふ

師開正寺に移るの後須臾にして一切經藏を建立せらる○寛政二年春富山市專福寺に觀經玄義分を講す○同三年四十二歳擬講となる○同四年三月二十六日 宣旨して權律師に任せられ夏大學寮に二十唯識述記を講す○同五年四十四歳嗣講に進み夏大學寮に群義論を講す○同六年夏大學寮に文顯聚抄を講し同年八月二十八日より高岡市專稱寺に御本書を發講し聽衆頗る多し○同七年夏大學寮に義林書を講す○同九年夏大學寮に往生禮讚を講す○同十一年夏大學寮に勝鬘經を講す○享和二年二月三日より 法主坐前に正信偈を講し奉り同三月二十五日滿講す時に 宗主大門楮上に釋尊の象を安置せんと欲し印相のことに關して問ひたまふ所ありしに即ち答ひて施無畏滿願の相

一字佛頂輪王經に在りと書して以て奉る其強記なる常に如是し同年
 秋大學寮に一多証文を講す○文化元年春越中放生津町専念寺に改悔
 文を講し夏大學寮に維麻經を講し冬十二月東京淺草御坊に改悔文を
 講し題して即得往生義と云ふ○同三年夏大學寮に正信偈を講す○同
 七年正像末和讃を大學寮に講す此年春尾州末徒中異義を稱ふる者あ
 り 法主師と月院とに命じて之を糾判せしめ正路に歸せしめられた
 り○同八年二月十二日講師に任せられ 宗主の禮遇益渥し同年夏大
 學寮に文顯聚抄を講す○同九年夏安樂集を大學寮に講す○同十一年
 高僧和讃を大學寮に講す○同十二年自坊に於て御文五帖一部を適講
 す世に御文要義又は御文大綱鈔として傳はる○同十三年夏大學寮に
 正信偈を講し秋八月 法主坐前に佛說阿彌陀經を講し奉る○同十四
 年夏大學寮に入出二門偈を講す○文政元年夏大學寮に文顯聚抄を講
 す○同二年夏大學寮に往生論註を講す○同三年夏大學寮に選擇集を

講し後金澤に在りて執持抄を講しつゝ有りしが病の冒す所となり高
 岡に飯り翌四年五月十七日奄然として寂す時に年七十二師臨終前數
 日人に語りて曰某日余歿すべし死後遠からずして大災あるべし宜く
 警戒すべしと後果して大火あり惜むらくは師の建設せられたる經藏
 も爲めに局有に飯したり
 師か計音の四方に達するや緇素皆哭せざるは無く其葬るの日遠近よ
 り來り會する者無量數千人なりと云ふ
 師の門に業を受くる者實に二千有餘就中靈往は後に講師に任せられ
 其名望甚た高し又惠月は嗣講に進み亮空は擬講に進みたり
 師所講の書目は其詳細を得る不能と雖も今暫く拙寺所存の講録と其
 他見聞せし所に依り左に其一班を記す
 餘乘に屬する者

入阿毘達磨論

但舍本論

二十唯識述記

群疑論

義林章

勝鬘經

維摩經

論伽師地論

起信論義記

五教章

法界次第

異部宗輪述記

六合釋

般若心經幽讚

雜集論述記

顯揚論

宗乘に属するもの

佛説阿彌陀經

觀經玄義分

觀經序分義

觀經散善義

觀經定善義

往生禮贊

安樂集

往生論註

選擇集

讚彌陀偈

往生淨土論

大無量壽經

御本書

愚禿抄

正信念佛偈

入出二門偈

文類聚抄

三帖和讚

未燈抄

唯信文意

一多証文

尊號眞像銘文

執持鈔

本願鈔

願々抄

御一代聞書

一枚記証文

御文

自問自答御文

末代無智御文

改悔文

夏の御文

一流安心ノ御文

大門階上三尊手印大意

大門閣上三尊印相記

明治二十九年七月十四日印刷
明治二十九年七月廿一日發行

定價三拾錢

編纂兼
發行者

巴陵宣教



富山縣高岡市下川原町百七十八番地

印刷者

塩谷與右衛門

富山縣高岡市定塚町二番地

富山縣高岡市守山町五十番地

發兌所 學海堂

(高岡市定塚町塩谷活版所印行)

